# 不幸な異世界奮闘記

S×S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不幸な異世界奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ７８０８Ｋ

【作者名】
Ｓ×Ｓ

【あらすじ】
どこにでもいるような高校生……よりも少しだけ運の悪い高校生、氷上（ひかみ）　優（まさる）

突然奇妙な穴に落ち、その穴と繋がっていた不思議な世界に迷い込んだ優は、持ち前の判断力で、そこが異世界だと判断する。

そして優はその運の悪さから、想像もつかない程の様々な面倒なことに巻き込まれていく……

# 落下（前書き）

氷上（ひかみ）　優（まさる）

生れつき運が悪く、お人よしな性格。

持ち前の判断力と天性の勘で、その才能が発揮されることもしばしば。

中学生の頃までは極度のマザコンだったが、ある事件をきっかけに姉以外の家族には干渉しなくなる。

両親のことについては後々。

## 落下

俺は今、異世界で暮らしている。

地球と比べると科学的な面から見たらどこか劣るところもあるけど、この世界には地球にはなかった文明が存在している。

それが、魔法。超能力とも、超現象とも言われている。

この魔法は本当に便利なもので、地球で問題になっていた森林伐採や発電、また、交通手段としても使われている。

そして俺はこの世界では神童と呼ばれていて、運動をさせたら何でも表彰。勉強は小学生時に国立大学受験を好成績で突破、そして毎日５００人の女の子と獣人に告白されるという、リア充を絵に書いたような存在だ。

「優(まさる)、ご飯できたからそろそろ起きな。遅刻するよ。」

まあ、夢なんだけどね☆

「優、どうしたの？顔色悪いけど、なんかあった？」

「いや、あっちの世界から地球にきた時のあまりにもの落差に絶望してるだけだよ…」

そういいながら、俺は姉ちゃんの用意してくれた朝食のカレーにスプーンを入れる。

「つかなんで朝からカレーなんだよ……」

「だって昨日残っちゃったから、勿体ないじゃん」

「そう言いつつ姉ちゃんはなんでランチパック喰ってんの？」

「そ、それは賞味期限今日（２０１０年４月５日）までだから、腐らせちゃいけないと思って…！！」

「今日は２０１１年の７月１４日じゃない気がするんだけど」

「いいからあんたはカレー早く食べなって！入学式遅れるでしょ！」

「はは！はぐらかそうったってそうはいかないぜ姉ちゃん。蓮見高校の入学式は１０時半からだ。まだ７時前なのに…ってなんでこんな早く起こしてんだよ…」

「ああ、その時計、３時間遅れてるから。」

「は？そんなわけないじゃん。だって昨日の夜、遅れちゃいけないと思ってその時計、１秒足りともずれてないか確認したんだから。」

「うん。そのあと私が３時間遅れさせた」

なにを言っているんだこの馬鹿は……もし時計が３時間も遅れてたら今はもう１０時前で入学式には絶対間に合わ……

「……マジすか？」

「マジすよ」

「……なんで？」

「いつも時計を3時間前にしておいたら、時計を見て待ち合わせに遅れそうな時間でも実は3時間遅れてるから、余裕ができるっていう。お姉ちゃん頭良いでしょ？」

「……馬鹿」

「え？」

「それは3時間進めた時の理論だあああああ！！！！行ってきまあああす！！！！！！」

「ああ！！優！カレー残しちゃ駄目！！それに寝間着で行くの！！？待って！優！！優ーーー！！！！……」

「……ふぅ」

変な想像したやつ死ね。

ったく……姉ちゃんの天然ぶりにはほとほと殺意が沸くぜ……携帯で確認したら、３時間どころじゃねえ、もう１０時２０分じゃねーか…

蓮見高校には９時に出てバスに乗って電車に乗ってバスに乗っていかなきゃいけないのに……１０分で走りで行くとか、これなんて無理ゲ？

でも、もたもたしてたら高校自体終わっちまう…初日で欠席っていう不良には見られたくない！！

そう思って俺は、ストライドを更に広げて、陸上部員も真っ青のスピードで横断歩道に飛び出した。

信号が赤に変わったことにも気付かずに

危ない！！

そんな声が聞こえた気がして、俺はやっと気づいた。

前も、後ろも、横も

どこも車が通っていることに

当然ここにも……

「危ない！！！大型トラックだ！！！！！」

都合よく即死運搬車が突っ込んでいることに。

目の前に迫るトラック

急いでブレーキを踏む音

周りの人の悲鳴

突然足元に開いた穴

死ん……え？穴？

「あああああああああああああああああああ！！！！？？？？？？」

九死に一生を得るって、まさにこのことだね☆ミ

とか言ってる場合じゃないね☆ミ

## 落下（後書き）

氷上　しぐれ（ひかみ　しぐれ）

天然。一言で表すなら、一味違った天然。（あ、一言じゃねーや）

ブラコン。優を弟以上の存在として見ているが、優にそのことを悟られないようにしている。しかし、優に褒められたりした時は、少し自が出る。

容姿端麗。眉目秀麗のスーパービジンだが、弟以外の男には微塵も興味を持たないので、言い寄る男は鬼畜に沈めている。

両親のことについては後々

**睡眠（前書き）**

・追記

氷上　優　１５歳

高校生

## 睡眠

……

……なっげぇ……

いつまで落ちてんだ俺……

トラックに轢かれる直前、突如足元に開いた黒い穴。

そこに落ちるというよりは沈むという形で入り込んだ俺は、なんとまだ落下中だったりする。

てかこんな長時間落ち続けてるってことは、相当な高度だろ？全然九死に一生を得てないし…。

大体、あの穴はなんなんだ？

出口はどこに繋がってるんだ？

はぁ……。

考えたってわからないことは仕方ない……

……

……

優は寝た。

【ｃｈａｎｇｅ】

『……今週の１２位はかに座の方。予期せぬトラブルに巻き込まれてしまうことがあるかもしれません。焦らず、落ち着いた態度で行動しましょう。』

うわ～優最下位か～

……大丈夫かな……

……電話でもしようかな……

いや！そんなことしたら変に気があるって思われる！でも姉弟だし……う～……

私は今、優が行ってしまって、家に一人でやることもなくただニュース番組にチャンネルを回し、可愛いお姉さんが元気な笑顔で出ている星座占いを、何の気無しに見ていた。

『でも大丈夫！そんなあなたのラッキーアイテムは……カレーライス！』

「お！」

カレーって、ラッキーアイテムだったんだ！朝ごはんカレーにして正解だったな！

『……です。それでは、よい週末を～。』

「は～い！」

見えないところでも優の役に立っていると知って上機嫌になった私は、テレビの挨拶になんの抵抗もなく返事をしていた。

知らない人からみたら、変な人って思われるかな。

まぁ、優以外の人にどう思われても関係ないけどね。

『…では次のニュースです。最近になって現れた、突然地面に開く

正体不明の穴。人一人を軽々と飲み込むその穴に、また、犠牲者が出ました。』

……なにこのニュース？オカルト？

星座占いも終わったことだし、そろそろテレビも中断して洗濯でもしようかな。

そう思い、私はテレビのリモコンに手を伸ばした。

『優く』

え？

今テレビが切れる直前に、優の名前を言った気が……

なんとなく気になったので、私はテレビの電源をつけ、再度ニュースを見た。

『今日犠牲にあったのは氷上　優君。通行人の証言によると、優君は横断歩道を渡ろうとした際、信号が赤に変わるのに気付かずなかった模様で、突っ込んできたトラックに轢かれそうになった瞬間、突然地面に落ちるように消え……』

え？

**睡眠（後書き）**

・追記

氷上　しぐれ　１９歳

花の無職

**東京**

【ｃｈａｎｇｅ】

「……」

「……！！！」

……なんかうるさいな……もう朝か？

……

って

あれ？ここどこ？

「絶対勇者様だって！！普通空から人が落ちてくるわけないだろ！！」

「違う。これはきっとハンググライダーが途中で外れて落ちた人。」

「だーかーら！！ハンググライダーから落ちてこんなかすり傷で済むわけないだろ！！小説で表現できないくらいぐちゃぐちゃになるわ！！大体この人眠ってたんだぞ！！」

「ハンググライダーにはパラシュートくらいついてる。きっとそれを「あの…」！？」

「！勇者様！！」

笑顔が眩しいところ悪いんだけどさ、一つ言わせて

これなんてＲＰＧ？

現在俺の前には、俺と同い年くらいの元気そうな男の子と、綾波並に無表情な女がいる。

そして今俺はなぜか、日の光も入らない、見晴らしの悪い繁った森の中にいる。

「えー……と、ここどこ？」

「……記憶喪失？」

「記憶はちゃんとあると思うんだけど…
……それにしてもここって東京…とかじゃないよね絶対」

「トウキョウ？」

「……まあ今は東京のことはいいとして、ここは一体どこなわけ？」

「トウキョウって、何？」

ああ、もう！！

おばあちゃんか！？コイツは！！！質問に質問で返すな！！

「えーと……」

綾波に聞いても話はすすまないと思った俺は、もう一人の男の子に情報を聞こうと思い顔を向けたわけだが…

「えーと……なんで君は出合い頭に土下座してるの？」

それはそれは綺麗な土下座が眼前に広がった

「感激です！！！」

そう言いながら目の前の少年は姿勢を崩すことなく、顔だけをこちらに向け、畏敬の念の篭った視線をぶつけてきた。

希望やら期待やら尊敬やら、そんな視線を受けていたその時の俺の気持ちは

意味がわからない……そのうえこいつら、どっちも俺の質問に答えない…聞いてさえいない……

あえて言おうッッドン引きであるとッッ！

「伝説の勇者様が存在していただけで感激なのに、まさか目の前でその姿を見れるとは！感激です！」

何回言うんだよ

「トウキョウって、何？」

何回言うんだよ

「勇者様！」

「トウキョウ！」

うん、小説は絵が無い分、キャラクターには個性をだした方がいいよ？

でもさ…こんなに濃すぎることないんじゃないかな？

## 勘違い

「……つまりアンタは勇者じゃなくて、どこにでもいる普通の人間……てこと？」

「そうだと思う」

あの後３０分ほどしてやっと俺の話を聞いてくれた少年は、つまらなそうにそう返事した。

「はぁ～なんだよ、勇者だったら第一発見者として国から凄え報酬もらえたのに……言われてみれば、よくみたら俺と同じ年くらいのガキじゃねーか……はぁ～…つまんね」

中々腹は黒いらしい。

「俺だって意味わかんねーよ。気づいたらこんなところにいていきなり勇者呼ばわりされて……大体勇者とかお前頭「待て」大丈夫…なんだよ」

「アンタ……そういえばどうやってこの森んなか入ってきた？まさか本当にパラシュートで来たとかじゃないよな？」

どうやって……

どうやって…？

「俺、どうやってここに来たの？」

「質問に質問で返すなよ…」

あれ？そういや俺なんでこんなとこいんだっけ？

朝カレー喰って…

高校に向かおうとして…

横断歩道を渡る時トラックに轢かれて……

ん？

本当は優はこの後突然現れた穴によって傷一つ負わず助かるのだが、優は何故かそのことが記憶から消えていた

「はぁ…とりあえずアンタ家どこだ？わかるところまで「あああああああああああああああ！！！

「てことはここは……天国…！！？」

優は寝ぼけていた。

「え……てことは……お前ら天使…！！？」

「ちげぇわぼけ」

「トウキョウって、人？食べ物？」

自分が死んだと思い込んだ優はしばらく騒いだ後、突然その場でジャンプし始めた。

怪訝な表情で見つめる少年の視線など構いもせずに。

「なん……だと！？足がついてる！？死んでも足って無くならないのかよ！？」

「そうなんじゃない？」

もう対応をするのもめんどくさい少年は適当に優をあしらい、騒ぎが治まったら病院に連れていこうと決心した。

「こんな突然死ぬとか予想外だわ…姉ちゃん…姉ちゃん！！」

突然そう叫び走り出した優を、少年は止めようと叫ぶ。

「おい！この森の中で無闇に走り回るな！！」

「姉ちゃんがいるんだよ！！俺が何も言わずにいきなり死んだら、姉ちゃん寂しくて死んじまう！だから、会って最後の別れだけでもしてくる！！」

【ｃｈａｎｇｅ】

別れって……どうやってするつもりだよ！！

俺はそう思いつつ、段々遠ざかる自称死者の男を追いかける。

「おい！ユーリ！！あいつ止めるぞ！」

コクリと頷くクールビューティ……ユーリを横目で見て、すぐさま視線をあいつに移す。

この森は通称　樹海Ｌｖ２―凍森（いもり）―と呼ばれている、危険指定区域。魔物の方から襲ってくることはあまり無い場所だけど、それは静かに移動していた場合。あいつみたいに叫びながら走り回ったら、襲われてもなんら不思議じゃない。

「おい！！待てっつってんだろ！！！」

凍森（２）レベル程度の魔物なら、群れで襲われたって俺だけでも無傷で殲滅できる。

だけどあいつは…武器も何も持ってない上に、見るからに武闘派じゃない。

「姉ちゃんに会いたいなら、俺が会わせてやるから！！」

その上この森には［主］がいる。ぶっちゃけ、［主］なんかに会ったら、俺が１０人いても勝てないだろう。

それにユーリだってただじゃ……

だから、そんな最悪な事態になる前に、なんとしてもあいつを……
ん？

少年……もとい、カインがそう考えていた時、突然追い掛けている優の動きが止まった。

俺の言葉が聞こえた……わけじゃないよな、こっち見てないし。
なんかを見上げてるような…

俺はまた逃げないように一気にあいつに駆け寄った。

「おい！どうし……」

息が切れた俺はあいつの側まで来ると膝に手をついて呼吸をし、汗一つかいてない男を見上げた瞬間

「あ、なんだきてたの？
つかこのオブジェ凄ぇな。なんか少し動いてるし、超リアル。超コワイ」

絶句した

目の前にいる、カマキリ

だがしかし、体長は普通のカマキリの比でない

体長

１０ｍ

「オブジェなんかじゃない……」

最悪だ……

「え？」

「こいつは凍森の［主］……」

終わった……

「B級魔物…［狂った鎌］だ……」

## 病院

【ｃｈａｎｇｅ】

「魔……

魔物！？（笑）」

優は目の前の１０ｍはゆうに越えているだろうカマキリを見て、思った。

この少年は、病院に行ったほうがいいと。

「お前さあ、もう子供じゃないだろ？いい加減ゲーム脳はやめとこう…？それとも、天国の奴って大体そんな感じ…」

俺は目の前のカマキリに対しての警戒心を一切取り、頭の痛い少年

に現実を教えてあげようとしたが…

「終わった…」

……僕を見て！！！

コイツはなんでこんなに怯えてるんだろう

まさか本当にこの１０ｍ以上するカマキリが動き出したり…

ナイナイｗ

「さ……行こうか」

優は少年の手を掴み、振り返るとそのまま病院を探そうと歩み出したが…

「……あるぇ？」

目の前には１０ｍを越え、たまに頭が動く以上はほとんど微動だにしないカマキリの姿。

へー…二つもあんだ…

そのカマキリもオブジェだと思った優は、現在後ろにあるはずのもう一つのカマキリを見ようと首を回したが

「……あるぇ？」

そこにカマキリの姿はなく、見たことのない木々が縦横無尽に生えているだけだった。

「避けろ！！」

突然そう叫び手を引かれた優は、おもいっきりの不意打ちに反応できず、無様に右に倒れた。

「お、お前なぁ！！いきなり引っ張るん……」

瞬間

至近距離で花火を打ち上げられたかのような強烈な轟音が森に轟いた。

優が文句を言おうとした口が止まるのも無理もない。

先程まで微動だにせず仁王立ちしていたカマキリの鎌が、優がつい1、2秒前に立っていた地面に深々と食い込んでいたのだから。

手を引かれなければ、死んでいた

まぁもう死んでるけど

「逃げろ！！！」

## 解説（前書き）

なんか今回説明多くなっちゃった☆ミ

## 解説

「逃げろ！！！」

とっさにそう叫んだ俺だけど、格好悪いことに足が震えて、到底逃げられる状態じゃない。

しかし、カインがそうなるのも不思議なことではなかった。

この世界では、魔物と呼ばれる生物が多々存在している。

犬や猫のようにペットとして飼われている魔物もいるし、足の早い魔物どうしで賭けレースなんかに使われている魔物もいる。

そういう類の魔物は人間に対して警戒心をあまり持たずに過ごし、共存をしている安全な魔物。【無害な魔物（イノセント）】と呼ばれる魔物である。

だが、光あるところに陰ありと言ったところか、人間に対し敵意を向けたり、単純に食料としか見ていない魔物もまた存在する。

それらは全て恐怖と危険の対象とされる魔物という意味で、【狂暴

な魔物(バイオレンサー)】と呼ばれている。

そして魔物にはそれぞれ危険度や狂暴性をもとに位がつけられていて、アルファベットでＡＡからＨまでにわかれている。

Ｇ、Ｈランクの魔物はイノセントのような、人間に被害を及ぼさない、人畜無害な魔物。

しかしＦからは、危険度がいきなり増す。

Ｆの魔物は、下から３番目、狂暴な魔物(バイオレンサー)の中では一番下のランクということであまり警戒をしない者もたまに出てくるが、とんでもない。

凶暴な魔物(バイオレンサー)の中に、油断をして勝てる魔物など一体もいない。

例えばＦランクの中に黒ベコという牛の魔物がいるが、黒ベコの突進力は凄まじく、ダンプカーと正面から衝突しても、なんら引けをとらない。

そしてＤランクからＡＡランクの魔物の話は、後々していくとする。

Ｂ級の魔物なんて勝てるわけない……ここは逃げるしかない…

だけど

俺の隣にいるコイツも、Ｂ級の魔物……【ササガネムシャ】の後ろにいるユーリも、全く動けない。

さすがＢ級ともなると、威圧感だけで動きも止められるか…。

カインがそう思っていると、ササガネムシャはゆっくりカイン、優、ユーリを順に見た。

品定めでもしてるのか…はは、殺される順番を決められるなんて、なんか変な気分だな…でも仕方ねーか…俺でさえ指一本動かせないのに、戦闘向きじゃないユーリはもちろん、さっきの反応からしてろくに魔物も見たことないだろうこいつなんて……

その瞬間

動けるわけ…

ずっと黙り込み怯えているばかりだと思っていた優が走り出した

ない……んだよな普通……

それも

わざわざササガネムシャいる、目の前へと。

## とある優の宣戦布告（ボウゲンチョウハツ）

Ｃ級以上の魔物は、たった一睨みでＤ級以下の魔物全てのうごきを止めることができる。

それは魔物特有の技でも何でもなく、ただの威圧や殺気。人間でも達人ならばできる、自分より格下の相手に恐怖を与え体の自由を奪うそれだ。

そして、凍森の主ササガネムシャはＢ級の魔物。この魔物の威圧に対抗できる人間なんて、めったにいない。

ましてや１５歳の少年で動ける者なんて、今まで一人も存在しなかった。

それなのに……

なんでコイツは少しでも動ける……ましてや、歩くことなんて絶対不可能なはずだ！！

そして、カインは見た

「おいカマキリ……」

自分と同じ年の少年が堂々と胸を張り

「天国にきて嬉しくなりすぎて巨大化しちまったのか…？でもな」

「ただでさえあれなのに、でかくなると隅々まで見えて更に気持ち悪いんだよお前。」

大人でも裸足で逃げ出すB級の魔物相手に挑発をしている優の姿を。

「かっけえ……」

あれ…体が動く…？

いつの間にか俺を縛っていたササガネムシャの呪縛は解けていて、不思議に思った俺は顔を上げササガネムシャを見た。

怨

虫の表情は変わらない

だが、ササガネムシャからは明らかな敵意が放たれていた。

子供に威圧を破られた怒り

馬鹿にされた怒り

C級以上の魔物は、プライドの高い魔物が多く、ササガネムシャもその中の魔物のひとつ。

その瞬間、カインは悟った。

威圧が解けたのは、簡単には殺さないため。

逃げ惑う標的を追い掛け回し、足が止まったところを捕らえ、すぐには殺さずに体内に寄生型の魔物を生み付け、養分を徐々に失わせながら殺すという、残忍な手口。

そしてその敵意は、今完全に優に向いていた。

だが、いつまで経っても優は逃げる素振りも見せないどころか、自分から、一歩一歩ササガネムシャに近づいていっている。

ただただ口を開けて驚くカインとユーリ。それほどまでに優の行動は常軌を逸していた。

恐る恐る近づくことさえせずに、堂々と、震えもせずに近づいていっている。

そしてササガネムシャの射程範囲、鎌の届く位置まで入り込むと歩みを止め、力強い声で言い放った。

「天国がこんなやつらしかいない世界なら、まずその元凶をぶち壊す！！」

まるで自分は負けないと確信してるように。

そして、ここでひとつ思い出してもらいたいことがある。

C級以上の魔物はプライドが高い。

【狂った鎌】が、本性を現した

# 面白い（前書き）

**面白い**

【ｃｈａｎｇｅ】

【狂った鎌】

誰が最初にそう名付けたかもわからないが、ササガネムシャ…自分はそう呼ばれていた。

腕を振れば、瞬間林は更地に変わり

羽根を広げれば、獲物がいくらでも見つかる。

そして何者にも劣らない巨大な体

そんな自分を見て、人は畏怖の念を込めてそんな名前をつけた。

自分から人を襲ったことは、ない。

Ｂ級というだけで名をあげようとする馬鹿を懲らしめたことはあるが、人を喰ったことなど一度もない。

だけど、時が経つごとに自分は人に恐れられて、討ち取ろうとする者が増える。

だから自分も威圧で恐怖を与える

そしてまた恐れられていく

もう、それが普通となっていた

だが…こいつはなんだ？

見た目１５、１６歳の少年のくせに、威圧にも怯むどころか立ち向かい、威圧を解いても逃げるどころか立ち向かってきている。

他の二人もそうだ。

せっかく逃げられる道を作ってやっているのに、なぜ立ち止まっているんだ？

こんな人間……初めてだ

しかもそれが全員子供とは……

……

気に入った

## 面白い（後書き）

遅くなって大変さーせん

## 名誉の死（前書き）

なんかこの章……つーかこの章もぐだぐだ…

**名誉の死**

【ｃｈａｎｇｅ】

どういうことだ……

現在目の前で繰り広げられている状況

【狂った鎌】

ササガネムシャがそう呼ばれるようになった原因の一つ、【サードサイス】別名【懐刀】と呼ばれる、ササガネムシャの腹から出てきた３つめの鎌。

それはササガネムシャの特徴の一つ。

自分と同格の相手の時にだけ現れる物だった。

だからこそ、カインは驚愕していた。

あのひょろひょろした優が、B級の魔物と同格…！？

本でしか見たことがない魔物が、本でしか見たことがない技をしている。

実際鎌が腹から出てくるなんて半信半疑だったが、なんのことはない、腹を突き破って現れた。

動けねえ

いや、もう威圧の時から動けなかったけど、その時とはちがう感じで動けねえ

【懐刀】まで出したB級魔物と

【懐刀】まで出させた謎の少年

悔しいけど…

決着が着くまでは動けねえ

これは、怖いとは違うな

この二体の決闘を邪魔しちゃいけないとか、心のどこかで考えてる
俺がいるんだ。

そして

最後まで見たいっていう、欲張りも

長い。

もう何時間も睨み合ってるんじゃねーか…

俺はその緊張に耐え切れず、腕にはめている時計に目を向けた

――瞬間

まだ５分！？嘘だろ！？

――時計に目を向けていたのはほんの１．２秒

いつまで続くん…

――そして目線を時計から離し、前を向くまで０．５秒

その１．７秒というわずかな時間の間に

決着はついていた。

目の前には、右の鎌に血を付着させたササガネムシャと

地面に血溜まりをつくり、ピクリともしないうつぶせの優

……

……ああ

優が……殺されたのか…

付き合いが長いわけでもないし、あまり悲しみは生まれない。しいて言えば「残念だなぁ」。これくらい。

でも……

ササガネムシャが、ゆっくりと体をこちらに向けるところを見ると…

次は俺達が殺されるのか……

戦う……ことすらできずに殺されるのかなぁ……

だけど……

「ユーリ！！！」

どうせ死ぬんだったら

「威圧はもう解けてる！だから……」

最後は…さっきの優みたいに…

「俺の分も逃げろ！！！！！！」

格好よく死んでやる…！！！！！

来いよ、B級…！！！

## 名誉の死（後書き）

更新遅れてマジサーセン！てへりんこ☆ミ

なんつーか、小説書くって大変

文章思いつかねーし

内容考えつかねーし

文章思いつかねーし

死ぬ…

**相棒**

【ｃｈａｎｇｅ】

……

……あれ？

俺……なんで倒れてんだ？

なんで……何も見えないんだ？

……あ、そっか

カマキリか

あいつに裂かれたのか

全然、いつ動いたのかさえ見えなかった……

あー……

2回死んだらどこに行くんだろうな…

『フフ…いい様ね』

ていうかなんで天国にあんなもんいるんだよ

『…ねぇ、聞いてんの？』

もしかしてここ地獄だったのか？

『ちょっと、無視しないでよ』

じゃあさっきのカマキリは、悪魔？

『ねぇ、泣くわよ』

そんじゃあの二人はなんだったんだ？

『……』

まさかあいつらも悪魔だったのか？

『……ぐす…』

で、何？

『…う……うぅ～……』

……まぁ…あんたはなんなの？

『……すん…』

泣き止めって

『う、うる、ううるひゃい…！』

言えてねーし…ほら、待っててやるから早く泣き止め

『も、もとはと、いえ、ば、あんたが、無視、するから…』

いや、だっていきなり頭んなかで声がしたから、幻聴かなって

『だ、だとしても、あんなに溜めなくてもいいでしょ！！』

お、泣き止んだ

『うるさい！！とりあえず謝りなさい！』

ごめん

『もっと心を込めて！！』

ごめん

『もっと謝罪の気持ちを持って！！』

ごめん

『もっと誠心誠意！！』

死ね

『な…死ね…って……すん…』

話が進まないから泣き止め

で

『な、何よ！？』

アンタ……つかお前なんなの？

『なんで変えたの！？まぁ…答えてあげてもいいけど、電気つけてよ』

は？電気？

『だってあんた今、心のスイッチ切ってるでしょ？こんな暗い心で話したくないわ』

お前、心のスイッチとか心の電気とか、さっきから何言ってんの？

『は…あんたスクイード人なら、心のスイッチくらい心魔学で教わってるでしょ！？』

ころま……なに？

『こ！ろ！ま！が！く！本当に知らないの！？』

はは、ちょっと、何言ってるかわかんないや

『嘘でしょ……こんな馬鹿がパートナーなんて…』

パートナー？

パートナーって、何だよ

『あんた本気で言ってるの！！？スクイード国内で知らないのって、多分あんただけよ！！？』

だから、まずスクイードってなんだよ。ここ、あの世だろ？

『は……あー、駄目、あんたと話してるのめんどくさい！！』

それ完全にこっちの台詞だろ

『からかってるんでしょうけど、一応教えてあげる。パートナーってのは、そのスクイード人の心から生まれる聖なる魔物。で、パートナーはその人間の魔力によって生まれる形が違くて、動物の形だったり人間の形だったり、中にはソファなんてやつもいたわね。そのパートナーは使い手の人間の魔力の濃さや強度によってレベルがあがって、使える技が増えたり、より強くなったりするわけ。満足？』

……

『？……何よ？』

いや、なんかマジに聞いてた俺が馬鹿馬鹿しく思えてきて…

『……は？』

だってこれ……

１００％夢じゃん？

## S級の魔力

『あんた…まさか本当にスクイード人じゃないの！？』

俺は、日本人
そしてここは夢の中

『ニホン！？どこよそれ！！ていうか何でスクイード人じゃないのに、相棒が生まれるのよ！！』

さぁ？夢だからじゃね？
てか夢なら……

『……キャッ！』

おお、ついたついた…でも明るすぎるな…ちょい下げるか

優が夢の中の声だと思っている人物の驚いた声がした途端、暗かった部屋中に明かりが点った

『ス…スクイード人でも無いのに、なんで心のスイッチを付けられ

るのよ…それに明るさの調整なんて聞いたことない…』

いや、頭の中で電気のスイッチつけるイメージしただけ。そんで豆電球にしただけ。まぁそりゃ夢なんてなんでもありだからな（笑）

『（笑）じゃない！！まったく…』

いきなりついた激しい明かりにまごついていた二人であったが、徐々に慣れて互いの顔を確認した

『（格好いい……）』

うわ、不細工

『ちょっと！聞こえてるわよ！！』

だってお前……ツンデレで泣き虫ってどんなやつかと思えば……何それ？

優の目に映っている女の子

それはお世辞にも綺麗とは言えなかった。

豚のように潰れた鼻、みかんのようにそばかすだらけの頬、そして、肉まんのようなふくよかさだった。

『まぁ、私は生まれたばかりだから自分の顔がどんなか知らないけど…そんなにひどいの…？』

非核三原則に確実にひっかかる顔だね

『誰の顔が放射能よ！！…まぁいいわ、あんた以外に見られるわけでも無いし』

俺もできれば見てたくないけど

『とりあえずあんたの名前を教えて』

凄いいきなりだな。不細工には教えません

『今はふざけてるんじゃなくて、契約のために名前が必要だから教えてってこと』

契約？いや、夢の中だとしても契約ってものは可愛い子と『さっさと言え！！』氷上　優です！！

『じゃあ優、私の名前を決めて』

……あー……ポケモン的な夢なわけね…はいはい…

じゃあぷっくりしてるからぷー子！

『…いちいち腹立つやつね…まぁいいわ。これで私と優が契約したら、優の中の魔力を私が引き上げて、優の意志で自由に魔法を使うことができるようになるから…本当は１０歳のときにやるんだけどね…』

妙に造りが凝ってるな…

『…じゃあ行くわよ！……ｔｐｊｐｄｊｍｐうぇｊｔｐｊｐｊｕａｇｊｇｊｐｋｍｊｍけｊｇｔｇａｍ０ｇｊｔ@ａｍｔｐブｊｏｔｊｇｎｈｔｐｊ』

……（驚愕中）

『ＨＮＫＡＧわＰＮＴＪｎＨＭＪＧＴＡＭＧ０ＪＭＧＭＪＧＭゃぃＫＰＭＧＴＪＭＧＴＭＰＴＭＧＴＪ』

……（どんびき中）

『●◎◎□◎○△■△▲★▽◆☆※▼↓・∀・』

……（ヤバイ人を見る目）

『；｀｜；゛｜゛。゛。」。……ふぅ…契約完了よ…』

あ、ああ…お疲れ……

てか契約したからって……うぇ！？

優が言いかけた途端、ぷー子の身に変化が起こった

丸かった顔は徐々に肉が消えていき

潰れていた鼻は高くなり

あれほどあったそばかすは見る影もなく消えていた

あの『えええええ！！？？？？』えええええ！？

あまりの変化にぷー子に話しかけようとした優だったが、驚いていたのはぷー子も同じだった

『（魔力の魔の字も知らない馬鹿だからどんなに少ない魔力かと思ったら…何よこれ…S級ハンター並の魔力じゃない！！？）』

あ…あの…ぷー子さん…？『あんた！！』はい！？

急激に姿が変わってしまい、もはや夢という考えさえ忘れている優は姿が変わった理由を聞こうと思ったのだが、逆に言われてしまった。

『あんた！！属性は！？』

い…妹属性…

『違う！！赤、青、銀、緑、黒、白属性のどれ！？』

## 決着

【ｃｈａｎｇｅ】

くだらない…

久々に現れた人間は、子供のくせになかなか肝が据わったやつだと思ったのだが…

結局は俺の鎌の一振りで地に沈む…

やっぱり、人間なんか最初からどいつも俺の敵にはならないのか…

まぁ、いい。もう、興味が失せた。

このこの世の終わりみたいに震えてる二人をとっとと帰すとするか

「おいお前ら…」

俺がそう言いかけた刹那

突然、さっきまで倒れていたもう一人の人間が動きだした。

いや

動き終わっていた。

熱い

右腕が焼けるように熱い

何故だ？何故俺の右腕が無くなってる？

そして何故だ？

何故あのさっきまで倒れていた人間が俺の右腕を持っているんだ？

理解しても、理解できない。

自分と人間の間にあった距離

それはＢ級魔物の俺に気づかれずに俺に近付き、俺に気づかれずに俺の右腕をひきちぎり、俺に気づかれずに元の位置に戻る。

そんなことをできるはずが無いほど離れている。

それに距離が離れていなくたって、俺が不意打ちと言え人間に腕をもがれても存在に気づかないなんてありえない。

そう思いながら、俺は俺の右腕をまじまじと直立で観察している人間を見る。

「きったね」

そう吐き捨て、人間は俺の右腕を汚いものでも触ったように放り投げた。

売れば数十億はくだらない、Ｂ級魔物の腕を。

「なぁ…」

突然、人間が何かに気づいたように俺の顔を見ながら話しかけてきた。

「ぷー子に聞いたんだけどさぁ…C級以上の魔物って人間の言葉使えるんだろ？」

…ぷー子？誰だ？
まぁ、隠すようなことでもないか。

「よく知ってたな」

「いや俺は知らなかったんだけどね。でさ、提案なんだけど…もう俺には敵わないから、帰ってもいい？左腕も無くしたくないしょ？」

言い終わった瞬間、放たれた凄まじい殺気。

殺気と言うより、これは邪気と呼ぶほうがふさわしいのかも知れない。

いずれにしろ、俺はこんな人間と会ったことがない。

「なんでだ？」

口をついて出たのは、そんな言葉だった。

「なんで…？」

「なんで帰るんだ？お前はこの戦がおもしろくないのか？」

長年、比べる者がいなかった圧倒的な力。

人間はおろか、魔物でさえ自分と対等に戦えるのはほんのわずか。

人間なんて、最初から眼中に無かった。

しかし今俺の前には、一瞬でＢ級魔物の腕をもぐ人間がいる。

しかしそいつは、争いをせずただ帰ろうとする。

俺にはその意味がわからなかった。

「別に…戦わ無くて済むなら、俺はそれでいいと思う。自分の力が下なら、怖いから逃げる。自分の力が上なら、戦っても無意味だから逃げる。」

……

こいつ……

もし俺だったら、力が下でも構わず逃げずに戦うを選ぶだろう。

「逃げるのが格好悪いなんて言うけど、俺は勝ち目の無いようなやつと戦って負けて死んで誰かを悲しめる…そんなやつの方が格好悪いと思う」

そしてもし俺は相手より力が上なら、ただ自分の技の練習台として殺すやつだ。

「ただ…自分が敵より弱くても、戦わなくちゃいけない時ってのもある。」

そして目の前の人間は後ろで腰を抜かしている二人に視線を向け

「危険が、自分以外のやつにまで及びそうになった時だ。」

それを聞いた俺は、人間が残りの二人を抱えて逃げていく背中に、切り付けることはできなかった。

最初のあの高圧な態度も、あの二人がいたから。

自分が弱いとわかっていても、あの二人に被害が加わらないように、わざと自分一人を標的にした。

そしてその後、わざと攻撃され油断させ、隠していた力を出して俺の右腕を奪うことで戦意を失わせる。

「完敗……か…。」

悔しいが、あんな人間見ちまったら、もう魔物と戦うことなんてできなくなってしまうだろう。

だけど俺は、後悔なんてしていない。

あの逃げる人間の背中にもし切り掛かっていたら、俺は何か大切な

ものを失ってしまっただろうから。

あいつ、確か

マサル……って呼ばれてたな…

## ユーリの初恋、カインの驚愕

【ｃｈａｎｇｅ】

「ここまで来ればもう…」

ササガネムシャの視界から消え、追ってこないことを確認した優は優しく二人を肩から下ろした。

「おい、もう大丈夫だぞ」

いまだ意識はあるが放心状態の二人に優は話しかけ、先に女の子の方…ユーリが我に返り、数秒後、男の子…カインが。

「…信じられねぇ……Ｂ級魔物と出会って、無傷でいられるなんて…」

カインは自分の体を見回した後、そう口にした。

「ああ、怪我しなくてよかったな」

優はそんなカインを見て、嬉しそうな顔で言った。

しかし、ユーリだけは苦虫をかみつぶしたような顔をしている。

「でも……あなたが怪我……」

ユーリは、散々挑発したくせにあっさりササガネムシャに切られた優を見た時、優を情けないと思っていた。

すぐに逃げればあるいは逃げ延びれたかも知れないのに無意味に侮辱して標的になって、何もできないのか、と。

しかし、違った。

優は自分達を守るために自らに狙いを定めさせ、自分が切られて死んだと見せて、標的の消えたササガネムシャを帰そうとした。

だけど予想は外れササガネムシャが私達にも危害を加えそうになっ

たから、優は隠していた力を使って私達を守った。

最初から私達のことだけでなく、B級魔物の敵にさえ怪我をさせない為に、自分だけが傷ついたんだ。

私達を……私を、守るために……。

そう考えた途端、ユーリの顔が耳まで真っ赤になった。

「あー、大丈夫。俺怪我してないから」

そう言って優は着ていた制服を脱いだ。

「な……何を…！？」

いきなり服を脱ぎだした優を見て、顔を背けようとしたユーリだったが、その体を見て言葉が止まった。

「傷が……塞がってる…？」

ユーリの思っていたことを言葉にしたカインには、ただ驚愕の気持ちがあった。

カインがそう思うのも当然、スクイード人は、傷の再生なんていう魔法は使えない上に、自然治癒なんていう能力も聞いたことない。

それもそのはず、傷の治りが早いのは、一部の魔物の特徴だからだ。

犬

キュア

それは、一部の魔物が持つと言われる特性で、自分の傷ついた細胞を、時間をかけて徐々に治し、骨が折れた程度なら3日程で完治するような魔物も存在する。

だが、トカゲの尻尾や鮫の歯、ザリガニのハサミなどのように、体を離れた部位を再生することは不可能とされている。

あくまで傷ついた細胞、修復する物がある場合のみに発動する特性だ。

しかしキュアを持つ魔物はどれも小さい傷なら早いもので2〜3分程で治してしまうことから、戦う時はもたもたしてはいけない。こちらだけ傷つき、なぶり殺しにされるからだ。

だから、カインは心配した。

魔物の中に、高速のキュアの能力を持つS級の魔物が、この世界にはいるから。

しかし、その魔物の戦闘能力はS級と呼ぶにはありえない程に弱い。

おそらく、まともに戦えばD級魔物と同等か、それ以下かも知れない。

ならなぜそんな魔物がS級という、国さえたやすく一夜で滅ぼすような部類に分けられているのか。

その答えは、その魔物がスクイード人にとってあまりにも危険な存在だからだった。

高速回復という超希少能力さえ、その能力の前ではおまけのように思えてしまうような能力。

その能力があれば、何十人、何千人、何万人でさえ、あっけなく殺されてしまう。

特殊能力名、ミミック

別名、擬態だ。

擬態

それは聞いてしまえば、そんなことかと思えてしまう能力。

そして、そんな油断をさせないためにその魔物———Ｄａｎｇｅｒｏｕｓ　Ｏｆ　ｔｈｅ　Ｇｉｖｅｒ…ＤＯＧ（危険を与える者）はＳ級に部類された。

恐れるべきは、その擬態できる種類の多さからなっていた。

全身刃物や、部分を乗り物にもできるし、犬やアリなど、自分よりはるかに小さいモノにも擬態できる。

つまり、目には見えないミジンコや、寄生虫にもなれるというわけだ。

ということは当然

人間にもなれるというわけだ。

だから、カインは心配していた。

もしかしたら、優がＤＯＧなのではないか？

と

しかし、ＤＯＧは繁殖能力がない。

ＤＯＧはその擬態能力から一つの形状を持つ子を生むことができず、個体数は極めて少ない。

しかし繁殖能力がないのに、いつの時代もＤＯＧが存在し続ける理由……

それは、誰にもわからない。

ＤＯＧにさえわからない。

ただ、他のＤＯＧが死んだ時、別の場所でＤＯＧは存在している。

今まで一体以上ＤＯＧが発見されたことは無いのに（気づいてないだけでもっといるかも知れないが）、その一体のＤＯＧが死ぬと、またまったく関係の無い場所でただ一体だけのＤＯＧが見つかる。

ＤＯＧは何故か常に、世界のどこかに必ず生息している。

……

Ｂ級魔物を一瞬で屈服させ…

高速の治癒能力を持つ……

お前……

本当に人間……なのか…？

**いねぇ**

【ｃｈａｎｇｅ】

よう！俺は優！

なんの変哲もない、どこにでもいるちょっと頭の良さげな高校生（仮）さ！

ただ一つ皆と違うところと言えば……

何故か異世界に飛ばされちゃったってことだけかな☆

……

な……

なんでだあああああ！！！！！

俺は高校の入学式から遅刻したらいけないと思って、道を大急ぎで飛ばしていた。

だから周りが見えてなくて、俺はトラックに轢かれた

……ことになる筈だったのに、足元に突然開いた（元からあった？）マンホール大の穴に落ちて、九死に一生を得た。

しかしそこから始まった気が遠くなるほど長い落下の時間。

落ちているというより、エレベーターのように下っているかのような感覚だった。

そしてその長い時間をかけてたどり着いた（着地した）場所がここ、異世界　スクイード。

この世界では、人間は皆魔法という物を使えるらしい。

魔法……それは雄大で、巨大な自然の力を克服するでは無く共存す

ることを選んだスクイード人の祖先が神から与えられたと言われる、もう一つの人間の武器。

スクイード人は、赤、青、銀、緑、黒、白の六つの属性を持つ者に分けられる。

赤……それはあらゆる物を焼き、溶かし、飲み込む炎の属性。

青……それはあらゆる物の動きを凍らせ、敵に自由を許さない水と氷の属性。

銀……それはあらゆる金属を加工し、主に鉄鋼を自らの武器に戦う属性。

緑……それはあらゆる自然の力を借りることができ、自分より格下の魔物を手なずけることのできる唯一の属性。

そして、白と黒……

この能力の説明は、詳しくはしない。

正確に言うと、できないからだ。

ごくまれに赤、青、銀、緑のどの属性にも当て嵌まらないスクイード人がいる。

そのスクイード人の能力はどんなものであろうと、白属性と部類される。

それは、どの色にも染まらない【白】ということを意味する。

では黒属性とは何か

それは『はいはい！長い！！もうおしまい！』

お前ぷー子……俺がせっかくお前に教えられたことを復習してたのに、なんでお前が止めるんだよ…

『うるさいわね！いつまでもこんなところにいると、またさっきのあいつが来るから、早くその二人に街まで連れていってもらいなさい！！』

意味わかんねー…コイツが復習しろって言ったのに…

『なんか言った！？』

あー、意味わかんねーっつったんだよ！ったく…

俺はそう思いながら、いらだちをなんとか抑えた顔を作り、二人のいる方に振り向いた

……が……

「いねぇ……」

## 捜せ！（前書き）

すっげー遅れた

マジごめん

**捜せ！**

ん……まぁちょっと待とうか、一旦考えよう。

まず？俺がこの世界に（落ちて）きます。

そしてあの二人に会って、なんやかんやで巨大カマキリに会います。

俺があいつら助けます。

……終わりだよな？

で……

なぜ逃げた？

『あーやっぱり逃げられちゃったわね』

今までは頭の中か、なにもない空間…ぷー子の世界に俺が精神だけ入り込み会話をしていたのだけど、それだと俺がめんどくさいって思って俺の世界（スクイード）に呼べないかって思ったら、なんか成功したので俺の隣にいるぷー子がそう言った。

「説明長いわ！！！」

【……？】

「…なにがやっぱりなんだ？」

なんか普通に声出てた（笑）

【なんなのよ…まぁいいわ。いい？あの男子と女子が優から逃げたのは、優が怖かったからよ】

怖い？

この心の優しさが名前にも現れてる俺が怖い…？

「馬鹿な！！」

【馬鹿じゃないわ…むしろ賢い選択ね】

そう目の前で言う金髪ポニテ美少女（身長推定１５５ｃｍ）は正直超可愛い…

と、ふと思った優でした（笑）

「どういうことだよ」

【あんたがさっきササガネムシャ…でっかいカマキリにつけられた致命傷、もう消えてるでしょ？】

「ん？ああ…確かに。」

【自分の傷を高速で治す…それは超自然治癒と言って、なんで優がそんな特性あるか知らないけど、それは本来ごく僅かな魔物が持つ能力なのよ。】

「Σ（´Д`　）マッ…マジデ！！」

【そう…しかもその魔物の中にはそれ一体でスクイード国全体に危険をもたらすS級の魔物、〔ｄａｎｇｅｒｏｕｓ　ｏｆ　ｇｉｖｅｒ〕…通称、ｄｏｇがいて、ｄｏｇは人間に…擬態できるの】

「てことはあいつらは…」

【察しがいいわね…どうやら優を、ｄｏｇだと思ってるようね】

「それ…まずくね？」

【まぁあの二人が国にこのことを報告すれば、この森に兵器魔法が数え切れないほど降り注いで、魔物でもなんでもない優は影も残らないでしょうね。】

「ガチか…」

おいマジかよ…いきなりこんな世界に落とされたと思ったら、今度は魔物に間違えられて命の危機かよ！？

【だから…】

不幸なんてレベルじゃねーだろ…多分こんな体験してんの世界広しといえど俺一人だぞ！？

【早く…】

でも今はそんなことはどうでもいい…！！よくねーけど！このままじゃ俺マジで死ぬことになっちまう…！！こうなったら一刻も早くあの二人を…

【捜せ！！】

## 説明

【ｃｈａｎｇｅ】

今俺とユーリは森の中を全速力で走っている。

早く町に着くために。

早くあの男…ｄｏｇから逃げるために。

隙をついて咄嗟にユーリの手を引いて逃げたはいいが、振り向いたらすぐ後ろにいるかも知れない。

そんな不安に刈られ、俺はユーリの手を離さないままさらに足に力を入れた。

……が

俺の足はそこで止まった。

予想もしてなかった自体が起こったからだ。

「おいユーリ…何手ぇ離してんだよ！？」

ユーリが俺の手を強引に振り払ったのだ。

「…逃げる必要が無い。戻る。あの人を町に案内する。」

…ッ！何を馬鹿なことを！！

「戻るな！戻ったら今度こそあいつに殺される！！」

俺はそう言ってユーリの腕を掴んで引き止めたが、それもまた振り払われた。

「おいユーリ！いい加減に「いい加減にするのはカインの方よ！！」

俺は言葉が出せなかった。

今まで大声など出せないのではと思っていたユーリが、声を荒げて叫んでいることに

「あの人は私達を助けてくれた…一度も会ったことの無い私達を！！傷つきながら！それを私達は怖くて黙って見てるだけだった！なのに…あの人は助けてくれた！！」

ユーリが初めて声を上げたのは、あいつの為だということに。

「だから……え？」

俺は、走り出した。

これ以上ユーリの顔を見ているのが辛くて、声を聞いているのが悲しくて、俺はユーリを置いて走り出していた。

ｄｏｇ……優のいる方へ。

【ｃｈａｎｇｅ】

俺は今、森の中を走っている。

逃げた二人を追いかけて、ひたすらに足を動かしている。

『次の大きな木を左！』

ぷー子のナビゲーションを頼りに。

「本当に合ってるんだろうな！？」

他に当てもないからとりあえず従っているけど、どうもさっきから同じところをぐるぐる回っている気がしてならない俺は不安に刈られ聞いてみた。

なにせあの二人がこの森を出るまでに見つけないと、この森に兵器魔法だとか言うものが撃ち込まれる（かもしれない）。

『大丈夫！なんとなく…こっちにあの男女子のいる気がするから！』

「はぁ！？」

というのにそんなふざけたことを言うぷー子に驚き、俺は足を止めた。

「お前ぷー子……勘？」

『違うわよ！本当にこっちにいる気がするのよ！！』

「そういうのを勘って言うんだよ！！

うっわマジか！？これ絶対見つからないだろ！！」

自信満々で言うからその通りにしてきたけど…やっぱ同じとこ回ってるだけなのか？

そう思った俺は近くにあった大きな切り株に腰を下ろした。

『ちょっと！！何してんのよ！？逃げられるわよ！？』

「いいよ、もう…どうせ間に合わないって…しかも、まだあの二人が森の中にいるなんて保障は無いし…諦めよう…。」

自分で言っててなんだが、まさにその通りだ。この広い（？）森の中を直感でさ迷っても、見つかるわけが無い。

ましてや森…茂った木が邪魔になって、雪山で黒ゴマを探すようなものだ…。

『優…』

俺はそう思い、絶望的な顔を上げて前を見た。

そう…もう見つかるわけな…

『前…』

……

「いたーーーー！！！！」

「驚いたな優…いやｄｏｇ。てっきり追ってきてるもんだと思って

たんだが。」
目の前には、なぜ戻ってきたのかはわからないが、先程の少年が汗にまみれて立っている。
こちらを冷たい目で見据えながら。
対する俺は……
「……」
何故かわからないが見つけることができて、助かった気持ちから泣きそうになっているのを悟られないように男の子を凝視していた。
「意外か？俺が戻ってきたのが…。」
男の子は自分を見つめる俺を見て、何を勘違いしたのかそう尋ねてきた。
まぁ意外だけど。
「まぁ予想もしなかっただろうな、一度逃げた餌がわざわざ自分からやってくるなんて…ってな。俺だって最初は逃げてたんだよ。でもな…逃げられない理由が、逃げてる途中にできちまったんだわ。」
「……」
※ここらへんで、俺は足に力を入れてきている。
「それが何かわかるか…？そう…それはな、俺の連れの女がお前のこと「おおおぉぉ！！！！」を！！？」

俺は奴の話を遮り、ラグビー部真っ青のタックルを放った。

でも、俺こんなに足速かったか…？まぁいいや…とりあえず今は！！

「はっ…離せ！！」

「そいつはできない…わけあって君はもう一人の女の子の誤解を解く為の人質だ。」

こいつらの間違った認識を指摘してやらんと！

「……というわけで、俺は別の世界から飛ばされてきた人間なんだ。」

「……」

『……』

俺が自分の身の上話をし終わり、（強制的に）聞いていた男の子と

興味半分でついでに聞いていたぷー子は、話し終えたというのにまた俺から目を離さない。

「終わり…なんだけど」

俺がそう言うと、今まで黙っていたぷー子が口を開いた。

『にわかには信じがたい話だけど……本当なら心魔学もスクイード国のことも知らないのも納得ね…』

「……」

しかしこの男の子はまだ何も言わない。ただ、数秒ごとに鼻をすする音だけ聞こえる。

話しを聞く前まではあんなにやかましかったのにどうしたことかと思い顔を覗きこんでみたら…

「…何で泣いてんだよ。」

感動ものの映画を見終わった後のように、鼻を赤くし、目尻に涙をためていた。

「…俺とっ、同じくらいの歳なのにっ、そんな大変なっ目に合ってっ、なのにっ俺はあんたのことをっ魔物と思って攻撃しようとしてっ…」

どうやら相当涙もろい性格らしいけど、一つだけわかることがあるとすれば、こいつはいい奴だ。

「まぁ、とりあえず泣き止んでからでいいからそっちの話も「師匠！！」……」

目の前の男の子は突如涙を拭って自分にそう言った。

……

「師匠！！

…俺のことは今度から…カインと御呼び立てください！」

……

…こいつは、いい奴だ。

でも…多分バカだ。

**悪くない**

「師匠！！姉さん！！こっちです！！」

「……」

『……』

現在誤解を解いた俺はカインと名乗るこいつに町までの道案内を「是非！！」と言われたので頼むまでもなく着いて行っている。

（後から存在に気づいた俺の隣にいたぷー子を、一目見ただけで姉さんと呼ぶのはその美しさ故だろうか）

それにしても、こいつの態度の変わりよう…

理由もわからないが、先程の殺意に満ちた表情は顔から消えうせ、なんの真実味もない話しを少ししただけで声のトーンが上がっている。

やっぱりこいつ馬鹿なんだな…

そう思ってはいるけど、町までの道案内という仕事を進んでやってもらっている立場な手前、あえて言わないようにしている。

が……

「いやー！それにしても…師匠にはビックリ！させられることが多いすなぁ…。

最初は…本気でＤＯＧだと思ってたんすよ！？むしろその強さで人間っていうことの方が信じられないくらいで…実際Ｂ級魔物のササガネムシャの腕を一瞬で引きちぎったんすか……！？」

突然揚々と語っていたカインだったが、何かに気づいたかのように足を止めこちらに向き直った。

案内しろ。

「そういえばあれってどうやって腕もいだんですか！？切り裂くにしても道具なんて持って無いし、ましてや師匠はスクイード国にやってきたばかりなんでしょう！？まさか魔法が使えるわけも無いし…一体どんな方法で！？」

テンション高ぇ…

しかしそれまで豹変したカインに対してドン引きを通り越して無関心、時折カインが喋るときだけ絶対零度の本気で興味が無いもの、虫けらを見るそれと同じ視線を浴びせていたぷー子だったが、カインのその言葉を聞いたとたんにいつもの顔に少し疑惑がかった表情を浮かべ、意外にも話に乗ってきた。

『それが私もさっきから思ってたのよね…優がもし本当にその日本っていうことは違う次元の国から来たのなら、優は魔法が使えるのか、身体能力はどうなるのか、なぜ私、ぷー子が生まれたのか…今は疑問ばかりが浮かんで、答えは全て沈んだまま…。』

久しぶりに喋ったと思ったらなかなかの長文を繰り出してきたぷー子だったが、俺はそれ以上にあっけに取られた顔をしたカインに興

味が湧いた。

「お前、なんて顔してんだ。」

俺のその一言で我を取り戻したかのようにハッとした動きをしたカインは、まだ驚いたような顔でぷー子を見ていた。

『…何よ？』

「凄く…綺麗な声っすね…」

そんなことを抜かしやがった。

確かにぷー子の声は綺麗だ。例えるなら、綾波に感情が灯ったような。性格と反して、声だけ聞いているとまるで聖母のような、大人しく、優しく、弱きに手を差し延べるそんなイメージだ。初見は皆必ずそう思うに違いない。

ところがどっこい！

『…な…』

「綺麗なだけじゃない…気品もある！声も美しく容姿も端麗！師匠もさぞかし自慢できる相棒を持ちましたね！！」

『ば……』

「師匠もなかなか…いや、よくみたらかなりハンサムだし、これな

ら姉さんと師匠二人で並んだらカップルと間違えられちゃうんじゃないっすか！？

なんせ師匠は格好いいし、姉さんは可わい…」

こいつはそんなに甘くない。

『馴れ馴れしいのよ！！この馬鹿！！』

決め台詞とともに、激辛パンチがカインと俺（！？）に叩きこまれた。

女に殴られるなんて、いついらいだっけな…たまにゃあ悪くねえ…

あ、嘘やっぱ痛い！痛てて！

俺がそんなことを考えていると、ずんずんとぷー子が近づいてきて俺の前で立ち止まり、倒れている俺はそれを見上げる形になった。が、すぐに目を伏せた（ぷー子は最初会った時から身に着けてた黒のミニワンピースなのでスカートの中が丸見えなのだが、それを見ると大切な…何か大切なモノが壊れてしまいそうなので）。

『ダッ……ダレが可愛いですって…？言ってみなさい！優！！』

なぜ俺！？

俺は上を見ないように気をつかいながらやんわり答えた。

「俺に言われても……でもカインが言ってた可愛い姉さんってのは、

ぷー子のこと……」

『嘘つけぇえ！！！』

そういって本日二発目のボディブローが俺の内臓やらいろいろな重要器官を押し潰す感覚がしたが、感じなかったことにしよう。

いや……やっぱ…痛…い…

「師……師匠ぉぉぉおおお！！」

こっちを見ながらそう叫ぶカインを見ながら、俺は指でＧＯＯＤ！！サインをしながら

「あと……頼むわ……」

そういって崩れ落ち…ようとしたところをぷー子に頭を両手で捕まれ、倒れることさえできなかった。

後ろではカインが泣きながら師匠師匠叫んでる。

『あああアンタ、最初私を見た時は散々言ってたくせに、いい、今更何、か、かかか、かか可愛いとか言ってるのよよ…？』

なんだこいつ…そんなことどうでもいいだろう…だいたいなんでそんなこと…

ピーン！（体中の疲労と言う疲労が消え去り、天才的な閃きが生まれた効果音）

そうだよ…

俺は何を忘れていたんだ…

この目の前の殺戮虐殺娘…この娘にはもうひとつの名前があるじゃないか…！！

その名も…！！

ツンデレ美少女ぷー子！！

そうと決まれば簡単だ。ぷー子…ツンデレの対処法なんて、少し厳しく言ったあと優しくしてやるとフラグとかなんとかが立つって中学の頃のぎゃるげって言うゲームが好きな友達が熱心に語っていたのを覚えてる！

フラグが何かわからないけど、来た！

『ほほほら、早く答えなさいよ！』

「ふっふっふ…」

突然上がった俺の笑い声により、ぷー子の頭を揺らす腕と、カインの悲痛な叫びが止まった。

「ぷー子…」

『なななによ』

「確かに俺は最初お前に会った時、不細工だと思った。本気でゲ●吐くかと思った。こんな顔が生まれるなんて、世界の終わりだと思った」

『……え…』

「師匠…それは…」

「まだ俺のいた中学校の不細工なやつらの方がいい線行ってた。それほどにお前の顔は醜かった。」

『……は…はは……』

不意に、ぷー子の手が頭から離れ、今にも泣きそうな顔になり、行き場を無くした両手は、宙をさ迷っていた。

『…だ…だよね…可愛くないよね私なんか…！はは…何一人で熱くなってたんだろ…』

「いや……

お前は可愛い」

俺がそう言った途端、ぷー子の目が急に鋭くなり、その目が俺を捕らえたと思ったら、目にも止まらぬ速さで詰め寄ってきた。

手は宙に浮いたままで…。

『あんたが……優がさっきから言ってること、無茶苦茶だよ…！！慰めとか哀れみなら言わないでいいから…正直に言って…』

言ってるうちにぷー子の目の鋭さは徐々に消えて行き、もはや泣きそうになっていた。

……

ここや！！

俺はぷー子の両手を自分の両手で包みながら、優しくこう言った。

「　悪くない　」

これでこの騒動は終わりを迎え、俺達は無事町に着き、日本に帰る方法を考え……

る筈だった。

「ユーリ……」

## 2時間戦争

俺の天才的な閃きによって先程までの騒動は一時冷却化されて今は最寄の町まで案内をされているわけだが、カインを追い掛けてきたという理由で遭遇したユーリというこの女の子。
これがまた中々のくせ者だった…。

「…なんで逃げるの。」

「いや、ユーリそれはな、」

「言い訳なんていらない。」

「（無茶苦茶や…）」

来た途端にその涼しい顔には表さないが明らかに怒っていることがもろばれの女の子に、それに対して挙動不振になりながら謝っているカイン。

どうやらカインは見る限りではこの女の子に頭が上がらないくさい。

まぁわかるよ…。だって

「でもユーリ…俺はお前を守ろうとして…」

「言い訳なんていらない。」

「師匠がｄｏｇだと思ったから…」

「いらない。」

凄く…恐ろしいですもの。

そう思いながらカインがいないと動くことのできない俺は二人の口喧嘩…もとい説教を近くでぷー子と並んで見ていたわけだが、先程からぷー子の様子がおかしい。
時折こちらを見ては視線を戻し、耳まで届きそうな程顔が赤い。
友人が言うにはこれが俗に言うフラグが立つということらしい。…だからフラグってなんだよ！？

そういう感じで横目でぷー子を見ていたら、不意に二人を見ていたぷー子の顔から赤みが消え、俺を横目で見上げながら（まえ…まえ）と口を動かした。

まえ…前？

「！」

ついさっきまでカインを叱っていた筈の女の子が手を後ろに組み、俺の前に立っていた。

そしてこの娘も顔が赤い…フラグ立ってる？さっきまで氷点下に辿

り着きそうな目をしていたのに。

「……あ…」

女の子は俺の方を見て何か話そうとしたが、俺と目が合った瞬間に更に顔が赤くなり、それを隠すかのように言葉は止まり顔を下に伏せた。

……ちょっとちょっとこの娘俺に惚れてんじゃないの！？

「……ゅ……ぁ…」

と、思っていたら、目の前の女の子は俯いたまま何か小さくボソボソと話していることに気付いた。

「何て？」

「…私…ユーリ…って言う…ます。さっき…助けてもらって…あ…あり……。」

「（言うます？……蟻？？？）」

声が小さすぎて全く聞き取れないわけなんだが、なんだか聞き直すのも悪い気がして

「ア…アハハハ！アハッハハハ！」

ごまかし笑っといた（笑）

「師匠…つまりユーリはこう言いたいんですよ。「「私の名前はユ

ーリです、さっきは助けてくれてありがとう。好きだよ。」」って。
」

「そうなの！？」

しかしその返事が返ってくることは無く、俺がそう言い終わるころにはユーリと呼ばれた女の子が顔を真っ赤にしながら瞬時にカインの股間に蹴り上げを叩き込んでいた。

「違う…！！」

そしてその女の子、ユーリは時折ぴくぴく動く屍。もといカインには目もくれずにこちらを見た。

「嘘…。」

なにが？
自分が言ったことが？それともカインが言ったことが？と、いくつも質問が浮上したわけだが、

「へ、へへへぇ……。」

その言葉が俺の口から出ることは無かった。
だって…下手なこと言ったら俺（の息子）まであの美脚の餌食になってまうから。カインもとい跳んで金魚バチから出てしまった金魚のように時折動くがやがてぴくりともしない屍になってしまうから。
長いな。

「また個性的な人が来たわね…。」

すると今の今まで黙っていたぷー子が俺に話しかけてきた。
「ああ…この国ってこういう子達ばっかなの？」
「知らないわよ。」
自分から話しかけといてそんな。
そう思いながら視線をユーリの方に向けると
ん？……
……！！
そこにいたのは先程までの顔を赤くした可愛らしい少女では無く、
鋭い瞳でぷー子を睨みつける凶女だった。

思わず二度見しちまった…だってなんか別人みたいなんだもん。
しかも俺がこんなに近くで見てても気づかないってことは、そうとうぷー子のことをガン見してるっぽい。
どうやらぷー子もその視線に気付いたらしく、先程までの暇そうなトロンとした目が開かれ、ユーリと向かい合った。
「…何？」
「あんたが先に見たんでしょ？何？」
「……別に。」
「何よ。言いたいことがあるならいいなさいよ。」
「…別に。」
もうなんなんだよ？

この世界は常に誰かと誰かが争うように作られてんのか？
目の前で繰り広げられるぷー子と沢尻エリカお嬢様、もといユーリの激しい攻防（クチゲンカ）を見てるとつくづくそう思うわ。
そして俺は二人が騒いでるうちに、今だ動かないカインへと近づいた。
「も、もしもーし…生きてる？てかちゃんと付いてる？」
動かないながらに両手で股間を守るように覆うカインの姿を見たら、何故か涙が出てきた。なぜなら今カインが味わっている痛みは俺も自転車で急ブレーキ踏んだ時とかによく直面するものだから。
まぁこいつの場合トー（つま先）キックだったからそれどこじゃねーか…
そうしてカインが起きるまで女二人の様子を遠目で見ていると、不意に目を覚ました。
「うぅ…まだ股間が熱々の肉まんを勢いよく喰った時の舌の如く焼けるように痛い…。」
どんな例えだ…。
「おはよう、君が起きるのをずっと待ってたよ。」
「ん…ああ師匠、おはようございます。…ところで」
そしてカインはぷー子とユーリの方を一瞥して
「どういう状況ですか？」

「わからん。とにかく止めて、案内して。」
「え゛」
そりゃ　え゛　も言いたくなるよな。だって怖いもんな。
さっきのカマキリなんかよりこっちのが全然怖ぇーよ。
「な？頼むよ。あのユーリって子はお前の方がよく知ってんだろ？」
そういうとカインは一度悲しそうに顔を歪めた。
しかし俺に見られたく無いのか、その顔をすぐに冗談混じりの苦笑いに戻した。
「知ってるからこそ止めようと思えないんですけどね…。」
俺はさっきのフルボッコつま先キックを思い出して、「あぁ～…。」と頷くことしかできなかった。
それから争いが治まるまで俺達は二人で静かにその様子を見守っていた。だけど、俺はその間ずっとさっきのカインの表情の意味を考えていた。
女同士のディベートが終わったのはそれから2時間後のことだった。
その時、俺は既に寝ていた。

## 旅館合宿

俺がカインに起こされた後もまだ二人は時々睨み合っては「フン！」みたいな感じでそっぽを向く状態だったので、俺は無事に町に着けるかがやたらと心配だった。
でもここでいつまでもいがみ合ってても仕方ないと言う事を言ったら二人は渋々納得してくれたので、俺達は先頭にカインとユーリ、その後ろを俺とぷー子が着いて行く状態で町に向かい歩き始めた。

「何でお前ら初対面なのに喧嘩してんだよ…。」

鬱蒼と茂った森の中の獣道を進んでいる途中、顔に掛かった蜘蛛の巣を手で払いながら前の二人（特にユーリ）に聞こえないように、俺はぷー子に尋ねた。だが、直ぐにそれが過ちだった事に気付いた。

「知らないわよ！！」

はいやっぱり！予想通りの答え！俺が小声で喋った意味まるで無し！そして突然のぷー子の大声に足を止める二人。後ろに向き直るユーリ。こらカイン震えてないでお前もこっち見ろ。

「…？」

何も口にせず、ただ俺の方を見て小首をかしげるユーリ。成る程、何を話してたか俺から説明しろと？…口が裂けても言えんわ。
俺が見つめられながら返答に困って嫌な汗をかいていた時、ぷー子が助け舟を出してきた。

「何でも無いわよ。だから前向いて案内してくれない？」

…まぁ多少言い方に刺がある物の、無難な答えだ。これで何とか事なきを得た筈だ。

…うん…だから…俺の目を見てないで早く前を向いてくれ…。

ぷー子の発言がまるで聞こえないかのような見事な無視をし、ユーリはじっ…と俺の返事を待っている。何？あくまで俺が言わなきゃ駄目なの？

まぁ…適当にごまかすか。俺の隣で無視された事で怒りが溢れ出してきているぷー子がまたユーリに何か言う前に。

「ぷー子の言う通り何でも無いって…。だからユーリも早く前向いて、カインと一緒に夜になる前に俺を町まで連れて行ってよ。」

何だこの自己中発言…これならまだ普通に正直に言った方がましだったな…。

俺はそう思い来るであろうトーキックに備えて身構えていたが、ユーリの足は直立不動のまま。俺（Ｊｒ．）に襲い掛かる気配は無い。

不思議に思って顔を上げてみると、俺は顔の真っ赤になったユーリと目が合った。

だけど俺には、この顔は怒って赤くなった訳じゃ無いように見えた。

「……私も…」

じゃあどんな訳で？そんな事を考えていると、やっとユーリがその口を開いた。

「…優…って呼ぶ…。」

「着きました…ここが首都の、ドーナツタウンです…。」

時間にして約１９時、案の定夜になってしまったが俺達３人は疲弊し切った体ながらも、どうにか森を抜けて町に辿り着くことができた。

何故３人なのかと言うと、１時間程歩いた頃にぷー子が木の根に引っ掛かり転んで足を擦りむいてしまい歩けないとの事で、そういえばぷー子はこの世界に具現化した俺の相棒だったと言うことを思い出し、一時具現化を解いて俺の心で休ませておいたからだ。

そしてぷー子が消えた途端にユーリが俺の隣に場所を変えた理由はわからないけど、特に拒む理由も無いからそのまま歩き続けたのはまた別の話。

まぁ、それはいいとして…

「ああやっと着いたのか…案内ありがとう。カイン、ユーリ」

首都ってだけあって流石でっけえな…それにしても何で首都なのにタウンなんだよ…。

…なんてくだらない事考えてる余裕無いよな…どうせ俺の持ってる金なんて使えないだろうし…異国ならともかく、異世界だもんな…当たり前か。

…と俺が夜をどうやって過ごすか考えていると、カインが嬉しい提案をしてくれた。

「師匠どうせお金も知り合いも無いでしょうから、今日俺ん家泊まりますか？師匠疲れてるでしょうから…」

そのカインの提案は、正に俺からすれば棚からぼたもちを形にしたようなことだったので俺は二つ返事でＯＫしたかったのだが、何故か俺の制服を先程から掴んで話さないユーリがおもむろに言った言葉を聞いた瞬間

「…うちに泊まって…。」

硬直してしまい、返事どころでは無かった。

落ち着け。冷静になれ俺。きっとこれはユーリの空気を読まない冗談なんだ。適当にあしらってここは一刻も早くカインの家に迷惑にならなくては…と思ったけど目がマジだよこの娘…。

この娘には事情を話してない。だから俺は偶然森の中を歩いていたら目の前に現れた得体の知れない変な男…とユーリの目には映る筈だ。

それなのに俺（とぷー子）をカインと共に町まで送ってくれたり、俺のことを名前で読んだりした揚げ句、果てには家に泊まっていけ？

このユーリって娘…最初のイメージが強すぎてカインと違って怖い印象しか持ってなかったけど…

前言撤回この娘もちょっと（良い意味で）バカっぽい。

「……って旅館かい。」

あの後、俺はユーリの心遣いをどうやってやんわり断るか考えていたが

「帰った…」

のユーリの言葉とともに周りを見渡せば、後ろには先程までいた森、そしてこの場にはユーリと俺と、本来いる筈のカインの消えた2人しか居なかった。

何故このタイミングで帰った…。

いろいろ不満もあった俺だが、唖然としていた俺を見てユーリが俺に放った「そんなに…嫌？」の一言に良心が痛み、むしろこの場で嫌がるのは普通あなたの方では？など考えながらも結局ユーリの家まで着いて来てしまい今に至る。

あまりにもの大きさと看板に書かれた［縦横旅館］というネームセンスの二つに驚愕しながらも、俺は勧められるがまま縦横旅館の中に入ってしまった。

そして俺は、この時まだ知らなかった。この後旅館の中で起こる数々の悲劇も、先に帰ったカインが自室で一人、悲しみで枕を濡らしていたことも…。

# しぐれ

【ｃｈａｎｇｅ】

「ここか…」

今俺は蓮見市の中でも大きい部類の病院の「蓮見病院」に来ている。名前が安易とかそういう感想は求めて無い。

俺は自動で開くドアをくぐり、ナースステーションの前である質問をした。

俺の名前は高守（こうもり）　悠斗（ゆうと）。元プロレスラーだったが試合で相手に片目を潰された事によってその資格を奪われた、警官だ。

そんな警官の俺がこんな病院に一人で来てる理由。それは

「蓮見暑の警察だけど、ここに氷上しぐれって人いるでしょ？」

今回のトラックに轢かれそうになった少年、氷上　優が突然開いた穴に落ちて消えたという事件（事故？）、その消えた少年の姉に弟の話を聞くためだった。

ただ…

（…あの人本当に刑事なの？…）
（なんか人相悪くて怪しいわね…）
（偽警官かも知れないから部屋教えない方がいいんじゃない？…）
この生れつきの顔の怖さとレスラー生活で造られたガタイの良さから警察とあまり信じてもらえず、更に片目が潰れてることでヤクザとさえ間違われることもある俺に、この仕事は少々厳しいものがあった。

「…もういい。」

背中に複数の視線を感じながら、俺は歩いて一部屋ずつ捜すことにした。

「３０６…違う……３１２…違う…」

一つの部屋に６人の患者、この病院が大きいが故に可能な部屋割だが、これがかえって俺には好都合だった。

これならそれほど歩き回らずとも、すぐに氷上しぐれの部屋が分かりそうだ…。

それにしても…氷上しぐれ…

報告に聞いた彼女は健康体である筈なのに、何故病院等にいるのだろうか…？

俺は４階の部屋割を確認しながら、そんなことを考えていた。

「４０１…違う。４０２…違う。４０３…違う。４０４……」

４０４号室

そこには［氷上　しぐれ］と書かれたプレートが、壁に掛けられていた。

いた……。

しかし、いくつかおかしい所がある。

第１に、その部屋の扉だけ新しすぎる。つい最近取り付けられたようにピカピカだ。

第２に、６人制の部屋の筈なのに、名前が二つしか書かれていない。

第３に、失踪中の筈の氷上　優の名前のプレートが、手書きで壁に掛けられていた。

俺は、扉を開けることを戸惑った。

ノックをすることさえ戸惑った。

なんだかこの扉の向こうに入ったら危険と、頭の中で誰かがしきりに囁いている気がして。

…気のせいか？

俺は自分の考えを否定する為に首を振り、何事も無く扉をノックしようとしたのだが。

「〜〜〜。〜〜」

中で誰かがボソボソと話しているような声が聞こえて、その手を扉に触れる前に止めた。

もしかしたら、事件に関しての情報が手に入るかも知れない。

そう思った俺はいけない事だと知りつつも、そっと扉に耳を近づけて、何と言ってるか聞き取ろうとした。

その瞬間

「何してるの？」

扉の中から、明らかに自分に対してと思われる声が発せられた。

その声は余りに綺麗で、華麗で、可愛らしくて、思わずその声に聴き入ってしまいそうになったが慌てて扉から頭を離し、何故自分がそこにいることがばれたのかわからずに立ち尽くしていたら、中からもう一度、あの美しい女の人の声がした。

「そんな所で立ってないで入ったら？お巡りさん。」

俺は戸惑った。

自分は、学生時代結構有名な悪として周りから嫌われていた。

柄の悪い連中とつるみ、毎日が喧嘩に明け暮れるような荒んだ日々。

親や教師の言うこと等、一度も聞いたことが無いかも知れない。

だからこそ、俺は戸惑った。

そんな俺が自分よりずっと若い娘に言われるがままに、ドアノブに手をかけて今まさにその扉を開こうとしている。

元々部屋に入るつもりだったが、確実に主導権を先に奪われた感は否めない。

俺が扉を開け中を見ると、そこには一つのベッドと花瓶、そして、一人の美しい女性が椅子に座りこちらを見ていた。

「こんにちは。」

その娘は俺の姿を見ても怖じけづくことも怪しむこともなく、ただ笑顔でそう言った。

何故こんな娘が病院に…

そんな考えが一瞬頭を過ぎったがすぐに掻き消し、やっぱりさっきの不安は何かの気のせいだろうと思いながら、俺は口を開いた。

「お嬢さんさぁ、こないだの事故で姿を消した氷上　優君のお姉さんだよね？ちょっと色々と聞きたいことが…」

しかし言葉を続けようとした俺の口は、その「氷上　優」の名前が出た時の氷上　しぐれの顔を見た途端、自然と止まっていた。

怒っているのだか、泣いているのだか、笑っているのだかわからないような顔。

俺はこの瞬間ようやく、自分はとんでもない相手と話しているのだと悟った。

## 茶柱

どうする…。

やはりこの病室に入る前の俺の勘は当たっていた。

この娘はやばい。

何で最初に気付か無かったのだろう。今となっては扉を開いて逃げることも一つの手段として頭に浮かんできた。

……

いや

何を考えてるんだ俺は…

確かに得体の知れないといえばそうであるが、目の前にいるのは俺の半分の歳にも満たないくらいの娘じゃないか。

それに俺には格闘技で鍛えたこの肉体がある。例え刃物を持って襲い掛かられても、怪我一つすることなく迎撃できるだろう。

そう思った俺は先程までの臆病だった自分を鼻で笑い、ポケットから煙草を取り出して口に銜えて火を付けた。

「タバコ」

……は！？

目の前には、少しムッとした顔で俺の顔を睨む氷上　しぐれの姿。

この娘はついさっきまでベッドに座っていた筈だよな！？しかも俺が目を離したのは煙草をつける1、2秒だけ

…は？は！？

いつの間に動いた！？しかも…

もしも氷上しぐれが危ない思想の持ち主だったら、今の間に俺は…

そう…思ってしまった。

人間は一度その人物に対して恐れを抱いてしまうと、その先どれだけ虚勢を張ろうと強くなろうと、その人物の前では足がすくんでしまう。例えば、昔自分をイジメていた子供にはいつになっても頭が上がらないようなもの。

だから、恐れてはいけなかった。自分自信を見失わない為にも、恐れてはいけなかった。

それなのに…

「禁止ですよ？」

俺は煙草を口から外し、携帯灰皿の中に捨てた。

「それで…私に何が聞きたいんです？お巡りさん。」

落ち着け…
頭を上げろ俺…
目の前の人物をよくみろ、ただの華奢な女の子じゃないか…
俺はそう自分に言い聞かせ、氷上しぐれと視線を合わせた。

「？
こんにちは」

再び普通に挨拶をされただけ…それなのに
何故か俺の足は小刻みに震え、手の平にはじわっとした汗をかいていた。

俺が震えて声が出せないでいるのを見た氷上しぐれは小さくため息をつき「またか…」と呟いた。

「とりあえず座って下さい…今お茶でも入れますから。」

そう言い俺を小さな椅子の前に移動させ、氷上しぐれはポットとコップを取り出した。…こんな状態の俺の喉は、茶を通すことができるのだろうか？

「ルンル～ン」

俺は言われるがままに椅子に座り、鼻歌を唄いながら茶をコップに入れる氷上しぐれの背中を見た。

…後ろで纏めた髪、女性らしい細い腕、患者服を着ててもわかる締まった腰に足。

こうしてみると後ろ姿だけでも美人と解るほどの端麗な体の持ち主だと言うことがわかる。

…と思っていたら茶を入れ続けている氷上しぐれが、俺に聞こえないくらいの声で口を開いた。

「人の体じろじろ見んなよ…」

すると氷上しぐれは突然こちらに向き直り、手と手をポンと叩きながら

「やっぱりポットのお茶よりも急須で入れた方が美味しいですよね！」

と言った。

この時には俺の恐怖心も屈託の無い笑顔を振り撒く氷上しぐれに少し和らいでいていた。

「いや俺は別に茶は…」

するとその瞬間またもや氷上しぐれはいつの間にか目の前に来ていて

「ちょっと聞き取りづらかったんで、もう一回言ってもらえます？」

と言った。

俺は即座に

「急須がいいです。」

と、額にじっとりとした嫌な汗をかきながら答えた。

「よろしい。」

氷上しぐれはそう言ってまた鼻歌を歌いながら、ベッドの下から急須と茶葉を取り出した。

何故そんなところに急須と茶葉が…？という当然の質問が頭に浮かんだが、口には出さなかった。

しかし…

「この茶葉家から持ってきた高級なやつでしてねー、とっても良い香りがするんですよ。」

こうして氷上しぐれをよく見ると…

「優もこのお茶が好きでね、初めて飲んだ時なんか「姉ちゃんが美味いお茶を入れるなんて！！」って驚いてたんですよ！失礼ですよねー。」

…なんか

「はい、できましたよー…あ！！」

「茶柱が立ってる！！！」

あまり…怖くないな。

俺は茶柱が立っていただけで大はしゃぎする氷上しぐれを見て、ふとそう思った。

## 茶柱（後書き）

…どうも！エスエスです！！

しかしこうしてみるといつの間にか自分の小説にもポイントをつけてくれたりお気に入りに入れてもらえたり…

なんか自分でも信じられませんw

お気に入り登録をしてくれている方や感想を書いてくださる方

本当にありがとうございます^^

こんな駄文ですが、これからも暖かい（↑誤字）目で見ていただけたら、俺はもう興奮して夜も眠れません。

では、以上。エスエスがお送りしました。

【ｃｈａｎｇｅ】

「……ふー。」

今俺はユーリの旅館の温泉に入っている。

疲れをとるためとの名目で勧められ断りきれずに入ってみたが、これがなかなかどうして心と体の疲れを洗い流すかのような心地よさを与えてくれた。

それにしても…

…こうして湯に浸かって温泉の温もりを感じていると、これが紛れも無く現実だということが思い知らされる。

俺が異世界に来てしまったことも、なぜかそこでは化け物が存在することも、

もう自分が簡単には帰れないことも…。

俺はそう思いながら、自分一人しかいない浴場で誰に問うでもなく

呟いた。

「俺にどうしろってんだよ…」

「何を？」

「色々だよ…お前がいきなり男湯に現れた時のリアクションとかな、ぷー子」

まさか返事が返ってくるとは思わなかったのに…冷静だな俺。

「んー…よく寝た！……ここどこ？」

そう言って軽く伸びをしながら周りを見回すのは先程とは違う寝間着のようなラフな服装をしたぷー子で。

目前には全裸で湯に浸かる俺の姿であって。

そしてそれに気づいたぷー子が固まるわけで。

「タオル持ってき……」

タオルを持ってきたユーリもそんな状況を見て固まるわけ…って何で来てんだ。ドアの外に置いとけ。

正直に言わせてもらうと

死ぬほど恥ずかしい。早くこの二人に消えてもらいたい。

でもここで俺が焦って暴れたら、今は事の凄まじさに硬直してる二人だが絶叫し出すかも知れない。

冷静に…ここは冷静に、何事も無かったように済ませるんだ。

心を落ち着かせろ…俺ならできる…。

「おいおいユーリちゃん…ここ男風呂だぞ？タオルはそこ置いといていいから、早く出て行きなさい。」

と、言うわけでまずはユーリだ…ユーリをこの場から一時的に消し、ぷー子を素早く脳内に戻す！これしかない。何、ユーリも女の子。自分が今男湯にいると言うことを指摘されれば恥ずかしさと外聞を恐れて出て行くだろう…。

「……。」

…と思ったら出ていかねーよ畜生。それどころか顔赤くして頬膨らましながらこっちに歩いて来るって意味わから…

俺の思考はそこで一度中断され、頭には左の頬っぺたの痛み、目には振り切ったユーリの右手だけが映った。そして耳には

「…この浮気者」

とんでもない言葉が入った。

そしてユーリはそれだけ言うと踵を返しそのまま浴室から出て行った。

……

未だ叩かれた意味と俺があんなことを言われた意味と結局何がしたかったのかがわからずに唖然としている俺だったが、ぷー子が俺の顔をじっと見ているのに気付いた。

「なぁぷー子、さっきのってどういう…」

……

…わぁ冷たい。

すっごく…冷たい眼。

あまりにもの冷たさに全裸の俺は耐え切れず硬直してしまったわ。

「優…」

そして…なんて冷たい声でしょう。

あれ？ここ温泉なのになんで俺こんな寒いんだろ。ちゃんと汗もかいてるのに…あ、これ冷や汗だった。

「浮気者って…あんた一体あの娘と何したの？」

ヤバい…恐い…このままじゃ…このままじゃ俺の中のもう一人の人格…［鶏優（チキンマサル）］が出て…

「な…な、何も？本当に何も？」

出てきた。

「…そういえばここ…どこ？」

「ユ、ユーリの家の旅館の銭湯のタイルの上…」

「ん…？」

「だ、だからユーリの…」

「…何であの娘の家にいるの？」

なんだよこれもう助けてくれよ。

## お喋りクモ

「だ、だからお前が寝てる間に色々あって…」

「色々って、何よ。」

「いや、そりゃ…い、色々？」

「死ね。」

あれからなんと３０分。その３０分の間俺はひたすら謝り、一向に怒りの冷めないぷー子をなんとかなだめようとしている。

しかし、いかんせん手ごわい。女に死ねなんて言われたの始めてだから最初はショックを受けてたけど、この３０分の間にまったく気にしないようになってしまった。慣れてしまった。つまり

「結局色々ってあれでしょ？どうせ私が寝てるのをいいことにあの子に背中洗ってもらったり一緒にお風呂入ったりそのまま流れでセッ「それ以上はあかん！」」

ずっとこんな感じだ。こいつもしかして変態なんじゃないの。

「とりあえずここで話してててもラチあかないし俺の体ものぼせるか

ら、頭ん中入ってろ」

「ちょ、まだ話は」

喋っている途中だったが俺はぷー子を頭の中に入らせ、鍵をかけて出れないようにした。

ちなみに頭の中に入らせるのは「戻れ」とか「帰れ」とか思うとすぐに入れることができ、俺が「出ろ」とか思ったりぷー子が出たいと思った時に出ることができるらしい。
そして鍵は今思いつきで頭の中で作ってみたらちゃんとかかったから、どうやらこの力は脳でできると思ったことが頭の中で創造される…ってところなのかな？わかんねーけど。

何にせよこの力だけに限らずまだこの世界では謎ばっかりだから、少しずつ解明していくことにしよう。

「ん？」

そう全裸で決めた俺だったが、ある事に気付き瞬く間に顔が青くなった。

「…あいつ（ユーリ）…タオル持って行きやがった…」
そう、先程俺に張り手をくれたユーリはなんとそのままタオルを持って帰ってしまったのだ。

体を拭くタオルは無い…しかもさっきまでずっと風呂に浸かっていたから寒くて仕方ない。おまけに着替えが無いから、また着るであろう学ランやＹシャツで水気を取るわけにもいかない。

困り果て考えに考えた俺だったが、ようやく一つの策が浮かんだ。

「…もっかい風呂入ろ。」

【ｃｈａｎｇｅ】

よう、いきなりだけど俺は蜘蛛だ。

まぁ一応名前もあるんだけどあんま意味ないから言わないでおく。

俺の名前はアーサー。

こう見えて結構あまのじゃくだ。

今はある旅館…縦横旅館だっけな？そんなだせぇ名前の旅館で巣張らせてもらってる。

蝶とか小虫とか色々引っ掛かってるけど、俺はそんなもん食わない。

俺はこう見えて、結構グルメだ。

自分が食うと決めたやつ以外、死んでも口をつけない。

ちなみに俺が一番好きな食べ物を教えてやろうか？

知りたくないか？

知りたくないか…じゃあ言わねぇよ。

人間だ。

特に脳みその部分が一番好きでな、あれならわんこでも行けるぜ。

え？何で蜘蛛のくせに人間食うのかって？

そんなんお前決まってんじゃねーか。

もちろん

教えねーよ馬鹿。

と思いきや湯舟に浸かった美味そうな人間（ごちそう）発見！

体つきも良いし、なんか勝手に蒸されてるみたいだし、何より若いってのがいいねぇ。

…それにしても何で蒸されてんだ？どんだけ長い間風呂入ってたんだよ。マジ、（笑）だぜ。

まぁそんなことどうでもいいや！とりあえずさっさと食いたいからさっさと食うか！

俺はそう思って、驚かせようと思い自前の糸を使いそいつの目の前にいきなり姿を現した。

そしてこれみよがしにこの気色の悪い、あ、自分で言っちゃったよ。まぁその８本の脚をこれみよがしに開き、精一杯のキモさを演出した。

すると奴はいきなり現れた俺に驚き固まり、すぐに俺の気持ち悪さに気付き暴れだした。

…

ってなるはずだったのに

「うわ、キモい。」

まさか冷静にお湯ぶっかけられるとは思わなかった。

【ｃｈａｎｇｅ】

「うわ、キモい。」

突然目の前に糸を垂らし下りてきた蜘蛛の姿を見て俺はそう吐きお湯で追い払おうとした。

昔から蜘蛛は嫌いだが、今はそんなことよりユーリの怒った意味とぷー子への上手い説明を考えなければいけないから、急いで頭を切り替えようとした。

「熱っ」

しかし俺の頭の切り替えは突如目の前から聞こえた声により切断される事となった。

…え？今この風呂場にいるのって俺だけ…だよな？

いや、人外を含めたらここにいる蜘蛛併せて2になるんだが…まさか蜘蛛が喋るわけないだろうし。

俺はそう思い、糸が切れ床の上に落ちた蜘蛛を見てみた。

すると蜘蛛の方もこちらを見ていて、毛むくじゃらの体についたお湯が冷や汗に見えんでも無いような感じだった。

「……」

まさか…

「お前が喋ったのか…？」

俺が言い終わった数秒後、目の前の蜘蛛はこちらを見ながらゆっくりと首を横に振った。

【ｃｈａｎｇｅ】

ヤ

ヤッベー！！あまりにも理不尽に湯かけてくるもんだから露骨に声出しちまったよ！！

露骨っつっても聞き取れるか聞き取れないかくらいのでかさだったけどこいつ気づいて…

めっちゃこっち見とるーー！！

そりゃそうだよね珍しいよねこんな蜘蛛いるわけないよねだって話すんだもんね！？

だけどまだこいつも完全に疑ってるわけじゃなく空耳との考えも頭の中に浮かんでいるっぽい。その証拠にこいつの目は半信半疑だ…今ならまだ間に合う！

「お前が喋ったのか…？」

俺は急いで、且つ冷静にその場を離れて何事も無いように逃げようとしたけど、不意に話しかけてきた人間にテンパりつい動けず、そのまま首を振ってしまった。

って馬鹿か俺はー！！？普通の蜘蛛は首なんか振らないましてやあ

そこで立ち止まったりしねーよ！！

「…やっぱりお前言葉が…！？」

うるせぇ！

とにかくこの場を離れよう！俺はその一心で人間の言葉も最後まで聞かず８本の脚を最速で動かして風呂場から抜けて脱衣所に入った。

…

来ないな…

あーびびった…俺がびびるなんて何年ぶりだろな…？

でも…

俺をびびらせた借りはでけぇぞ畜生…

おまけにこの俺に湯まで浴びせやがってあんにゃろうめ

お前は絶対、今日のディナー決定！

このアーサー・ゴッド…

別名ｄｏｇ。

Ｓ級魔物に喧嘩を売ったこと、後悔させてやるよ！

俺はこれからの計画を立てながら、ゆっくりと蜘蛛から猫に［擬態］した。

## 1

【ｃｈａｎｇｅ】

「……あれ？」

なんで私タオル持ってるんだろう？

えっと…

ま、優に持っていこうとして…

……

あれ…？

何があったんだっけ？

「…持っていこ」

理由はわからないけどどうやら優に渡し忘れてたみたいだから、私はもう一度（？）お風呂に行こうと振り向いた。

「ニャーン」

すると、真っ黒な猫が私の前に佇んでいた。

「…あれ？」

実際この家は汚…年期が入ってるからいろいろな野生の獣が入ってくることはたびたびある。

だけど…この猫はおかしい。

まず…

「二足歩行…？」

後ろの二本の足だけを使い、その体重を支えてるところが猫らしくない…と思ったら

「ニャオ」

「…」

その黒猫は私が指摘した途端、その違和感に気付いたかのように前足をゆっくりと下ろした。

そしてガラス玉のようなその瞳をこちらに向け、その頬からは気のせいか汗のようなものが…

「あ…」

私がそう考えてると黒猫は突然後ろに向き直り、（警戒するように？）私を横目で見ながら立ち去ろうとした。

が

「尻尾…」

私がその猫のお尻から生えてる尻尾がなぜか二本あることを不思議に思い口にしたら、その瞬間二つあった尻尾は、一本がもう一本に巻き付いて、何事もなかったかのように一本の立派な尻尾になった。

「…本当に猫？」

耐え切れず、私はとうとうその質問をした。
すると黒猫はこちらに向き直り、ゆっくりと頷いた。

【ｃｈａｎｇｅ】

や

やっっっべーーー！！！

本当の猫だったら頷くわけねーだろ！俺は馬鹿か！？

糞ッ最悪だッ！この女はさっき風呂場に来た、あの湯かけてくる男の知り合いだから人質にとって二人ともいただいてやろうかと思って後ろから襲ってやろうと思ったのに

ッッそれ以前の問題だよ！！

やばいやばいこのままだとさっきの男も追い掛けてきてるだろうから猛烈にやばいぞ…

しかしなんで俺はこういつも頷いちまうんだ！無視して行けばよかったのに！

～その頃の優～

「……なぁ、ぷー子。」

「……」

「この世界のクモは皆言葉がわかるのか？」

「……」

「……

はぁ……。」

大して気にしていなかった

「あー…あー…

あーもうめんどくせ、いいや。人質とか、作戦とか」

あれこれいろいろ考えるのがめんどくさくなって、俺は二足歩行で立ち上がった。

人質とか、こすい真似しなくてもこんなガキ娘一人、すぐ食い殺すことできるし…。さっきの湯男も所詮こいつと同じガキだし。回りくどいことしなくても二人とも喰っちまやいいわけだ、俺ｄｏｇだし？

「……人質？」

俺がそんなことを考えていると、目の前の女が口を開いた。

「それって…どういう「あーあー喋んなくていいから」

「これから死ぬ奴にはもう何も意味ない単語だよ」

「…え？」

なんかこの女、まだ状況がわかってないみたいだな…めんどくさい奴。少しわかりやすくしてやるか。

「つまりな…」

俺はそう言いながら空中に跳び上がり、体を丸くした。

【ｃｈａｎｇｅ】

「つまりな…」

目の前の二足歩行の猫は私に殺害宣言をしたあと空中に跳び上がり、その体を丸めた。

その途端、さっきまで猫だったその生き物はたちまち黒い水のような液体になり、フローリングの床の上にびちゃびちゃと汚らしい音を立てて落ちて、小さな水溜まりができた。

「…消えた？」

「「いるよ」」

……

今聞こえた声は、どこから…

周りを見渡しても、どこにも誰もいない。

不気味に思いながら、不意に得体の知れない黒い水から目を逸らせてしまったことに気づき、急いで前に向き直った。

「…消えた？」

「そればっか」

！

さっきの猫は消え

「あーあ、すぐ逃げればまだ助かるかも知れなかったのに」

謎の黒い水も消えた

「まぁ逃がすわけねーけどな」

だけど、今、背後に、確かに何かがいる

「ところで、初めて？」

さっきまでいなかった何かが…

「…」

「【擬態】。見るの、初めて？」

……

擬態……

…まさかこの生物…

「ｄｏｇって言葉、初めて？」

……

……優。

「いただきまーす」

**それでいいのか？**

［ｄｏｇ］

一般には、危険をもたらす者の意としてこう呼ばれる

しかし、彼らの名前にはもう一つの由来があった

『擬態』

Ｓ級魔物の中でも極めて異端。その何者にも姿を変えられる、正に神のような能力を持つ彼ら。

悪魔か？

はたまた

神か？

［Ｄｅｖｉｌ　Ｏｒ　Ｇｏｄ］

イニシャルをとって

［ＤＯＧ］

どちらとしても、人間は敵わない

【ｃｈａｎｇｅ】

「…あ？」

今俺は『シャープファング』という、狼の魔物に擬態してこの女に噛み付いて、肉を喰った

はず…なんだけど。

「…ッ、冷てッ！」

何故か肩の肉を噛んだ筈の俺の口の中には何も無く、代わりに俺の牙が凍りついていた。

見ると、女の周りは足元を中心に小さな凍った水溜まりができていて、それが女の体を護るように薄く立ち上っていた。

あれは確かD級青魔法、［守りのフラットアイス］…

「お前…青属性か！」

「…」

…ッチ、まずいぞ…。

『シャープファング』はD級だけど、スピードだけで破壊力はいまいち…おまけに青の、水と氷属性にはてんで相性が悪いし！

しかもあいつが今使ってる［守りのフラットアイス］は展開が早い分防御力にはかける雑魚自動防御魔法…青に弱い『シャープファン

グ』じゃなきゃ楽に壊せるもんなのに！

「…ッ！」

歯痒い！

一回［擬態］をしたら次の対象に姿を変えるまで若干のクールタイムがある…少なくとも後１分…

その間、こいつが待ってくれるわけが…

「…それが擬態？」

【ｃｈａｎｇｅ】

…こいつ…

畜生…こいつが青属性ってわかってたら別の魔物を選んで瞬殺だったのに…

「…そういえばさっき

お風呂場…って言った…？」

まぁでも、こんな餓鬼にやられたりするわけがない。１分くらい余裕でかわし続けられる。

まさかこんな餓鬼が上級魔法を使えるわけもないしな。

「お風呂場って…優？」

もし使えたとしてもあれには長い溜めが必要。その間は身動きがと

れないから、もし使えたとしてもその間に…「…優に何かしたら…」

……

「……は？」

「…許さない。」

「…まさかッ…

…こいつ！？

今の間、ずっと溜めを…！！？」

「…うん。」

体が…ッ動かな…

これはまさか…

B級捕縛魔法…［束縛のアクアルーム］！？厚い水を対象の周囲に

複数巡らせ気付かないうちに体の自由を奪う上級魔法…何でこんな

餓鬼が！？

「…優は私が守る。

それで…私は優に護られる。」

【ｃｈａｎｇｅ】

「うー、さむー。いい加減あがらねーと体がふやけちまいって」

俺は、どうやらタオルはいくら待ってても来ないということを悟り、溜息をつき風呂場から出た。

「って言っても濡れたまんま服着たら気持ち悪いしな…どうしたら…」

「…」

「…えっ？」

ふと気づくと、見知らぬ女子が今から風呂に入るかのような格好で俺の目の前にいた。

当然すっぽんぽんで

…あ…息吸ってる。

あ…来る。

「なんで男がここにいるのよ！！？最低！覗き！！」

「いやねこれはねちがくてね」

「変態カマドウマ！！」

「嘘ぉ！？そういう攻め方する！？」

「な、な、なんで裸なわけ！？もういいこっちみんな！向こう向け！向こう逝け！いっそ死ね！！」

お前だってなんも着てないだろ…。

「とりあえず！今は死ぬより…いや死ぬべきだけど！死ぬべきだけどなんか言うことあるでしょ！？」

「あ…ごめん、えっとお客さん？悪いんだけど、ちょっとバスタオル貸してくんない？服着れなくてさ。」

「……ち」

「？」

「ちっっっがうだろうがあああああああ！！！」

俺はその時、怒声と同時に、強烈な左ストレートを喰らったのを覚えている。

「…

凄ぇ痛い…」

「何か言うことは！？」

「…左利き…なんすね」

「それでいいのよ！」

そう言って女は倒れる俺にバスタオルを「ほら！」と被せ、鼻唄を唄いながら浴場に入っていった。

「これで…いいのかよ…。」

俺は途切れそうな意識を必死でつなぎ止め、なんとか服を着た。

## 捨て子

それにしてもさっきの女…宿泊客か？
この時間に風呂に入るなんて、余程の風呂好きなのか？ていうか俺は今までずっと女風呂にいたのか？

「…ま、いいや。それよりユーリを探すか」

着替え終えた俺は、こんな造りもわからない旅館の中の勝手がわかるはずもなく、適当にあちらこちらと闇雲に旅館を徘徊していた。

「なんでビンタされたのか知んないけど、まぁ風呂も入れてもらったし寝床も用意してくれたし、一応謝っとくか。…えと、浮気しちゃってすいませんでした？」

俺はユーリを見つけた時にかける声を考えながら突き当たりを曲がった。
すると、タイミングよく目の前にユーリがいた。

「…湯加減は？」

「いやでも…あれ？ユーリ？なんだ案外早く見つけられたな。最高だったよ…うわッ！」

突然現れた俺に驚きもせず、そう聞いてきたユーリ。
だけど、俺は驚かずにはいられなかった。
だって…
目の前に日本じゃ見慣れない…というか見慣れたくもない、１m弱

の牙が凍った狼が不動の姿勢で今まさに飛び掛からんと構えていたからだ。

「ユーリ…それ何？ペット…？」

【ｃｈａｎｇｅ】

ク…クソッ！動けねえ！

なんだこの密度！？水ってのはこんなに重いもんじゃねー筈だろ！？なんでぴくりとも動かねーんだ！？

「…重いでしょ」

俺がこの、目に見えない水の檻から抜けだそうとしてるのを見て、女は一言だけそう言ってまた、口を閉じた。

…なんだこいつ！？今のはなんだ！？

…馬鹿にしやがったのか！？

てか、仮にもこの［ｄｏｇ］を捕まえたんだぞ！？…完全に捕まったわけじゃねーけど！なら、もっと喜ぶとか浮かれるとかあんじゃねーか！？

Ｓ級魔物だぞ！？

お前らくらいの歳なら、名前どころか危険性くらい知ってんだろ！？

なら…

なんでそんな真っ直ぐ見てんだよ！？

違うだろ！

その目は、違うだろ！？

俺は、対等じゃない魔物だろ！？
魔物の中でも、他とは違った個の形を持たない異常な魔物だろ！？
他の人間みたいに、俺を恐れろよ！
他の魔物みたいに、俺を変わり者を見るような目で見ろよ！

その目で、俺を見るな！

昔…どれほど昔かは忘れたけど、結構昔のことだ。
俺は、ある山の中で静かに暮らしていた。
腹が減ると木の実を食べ、争いごとから避けてくらしていた。
もし戦いになっても、俺が使う力は俺のじゃない、他の魔物の力。
そんな力で勝っても、何も嬉しくない。
だから俺は周りからは、弱虫とか軟弱者とか言われていた。
悔しくは、なかった。どんな形だろうと、ほかの誰でもない自分自身のことを表現してくれるのが、むしろ嬉しかった。

その時の俺の姿は、F級魔物『タヌキック』
足が早いというだけのタヌキの形をした魔物だった。選んだ理由は、魔物から逃げるため。それだけ。

直線的な動きだけで考えれば『シャープファング』も越えるスピードを持つこの魔物だけど、破壊力とか、そういうのは皆無。無害な魔物（イノセント）と言ってもいいくらい、弱い魔物だった。

争いを避け、最低限の食事をとり、寝るだけの毎日。

なんの為に生きているのかわからない。
俺の世界は、真っ白だった。

ある日のことだった。

その日もいつもと同じように、腹が減ったから木の実を食べて、水を飲もうと川に行った時に、何かが川岸に落ちていた。

近寄って見てみると、やや大きめのバスケットに、中身が見えないように布が被さっているようだった。

俺はさして疑問も持たず、
ああ、上流から流れてきたのか
と思って布を剥ぎ取った。

すると中には、毛の生えてない小さな猿みたいなものが目を閉じてそこにいた。

なんだこれ…生きてるのか？

俺はそう思いながらじろじろ『ソレ』を見ていると、『ソレ』はゆっくりまぶたを開き俺を見た。

「……

えへへへ、ばぶー」

「！？」

『ソレ』は、俺を見つけた途端、嬉しそうに笑い出した。

…何でコイツは笑ってるんだ？何を見て笑ってるんだ？だいたい、コイツは何だ！？

その時、山から出たことの無かった俺には、ソレが人間という生き物とはわからず、ただ困惑していた。

でも、『ソレ』に自分が笑われていても、不思議と悪い気はしなかった。

「オマエ、ドコカラキタ？」

「あー」

「『アー』？『アー』カラキタノカ？」

「うー」

「『ウー』？ナンダソレハ？」

「あー」

「ヤッパリ『アー』カラキタンダナ！」

「ばぶー」

「ナンダソレハ！？」

俺は川岸に落ちていた『ソレ』に敵意がないことを知り、俺がいつもねぐらにしている小さな洞穴に持ってきて、いろいろ話しかけていた。

会話になっていない気がしないでもないが、『ソレ』の反応がいちいち面白くて、俺は夢中で話し掛けていた。

「う・・うう～」

突然、『ソレ』は今まで出さなかったような、何かを欲するような声を発した。

この顔…

「オマエ、ハラヘッテルノカ？」

俺が空腹時にする表情に今の『ソレ』は似ている気がして、俺はそう尋ねた。

「うう～」

「ヤッパリカ！ホラ、クエ、キノミヲヤル！」

俺はそう言って、普段俺が食べている中でも特に好きな木の実を『ソレ』の口の中に入れた。

「・・・うっ
うえっううえっ」

…が、しかし、『ソレ』はその口に入れた木の実をすぐに吐き出してしまった。

「ナ、ナンダ！？カタカッタカ！？」

「うえっ、うえっ、」

「チョ、チョットマテ！コレハドウダ！？」

俺はそう言って、先日見つけた赤い木の実（木苺というらしい）を口に入れてみた。

「えへっ、えへへへ」

すると、さっきまで眉間にしわを寄せていた『ソレ』はいきなり泣き止んだかと思ったら、今度は嬉しそうに笑い出した。

…なんて感情豊かな生き物なんだ…俺とは大違いだな。

「あー」

俺がそんなことを考えていると、目の前の『ソレ』は俺にもっと寄越せと言わんばかりに俺の手の中の木苺を奪おうと手を伸ばしてきた。

「モットホシイノカ？」

「あー」

「ダメダ、コレハオレノモンダ。ホシイナラ、ジブンデトッテコイ」

「あ・・・・・」

「ダメダ」

「ばぶ」

「ダメ」

「・・・・？

・・・！

オギャアアアアアアア！！！！」

『ソレ』は木苺をもらえないとわかった途端、いきなり大音量で泣き叫びはじめた。

「オ、オイ！ヤメロ！マモノガアツマル！」

「オギャアアアアアアア！！！！」

「ワカッタ！ヤルカラ！！ホラ！」

「オギャアアァ・・あ・・あー」

根負けして俺が渋々木苺を差し出すと、『ソレ』はさっきとは打って変わって、とても幸せそうな顔になって木苺にむしゃぶりついた。

…本当に感情豊かな奴だ…

泣いたと思ったら笑って、かと思ったら木苺の一つでまた泣いて…

でも、このままじゃ俺の柔らかい木の実は全部こいつに取られる…

面白半分で連れて来るんじゃなかったな…そうならないうちに、こいつを元いた場所に…

その時、『ソレ』はやたらとキラキラした視線で俺のことを見つめていたので、俺の思考は一度そこで止まった。

「…ナンダ？」

「あー・・・」

「モウナイ！！」

## 吸血鬼

それから、俺とそいつのしばらくの共同生活が始まった。

…と言っても以前と別段変化は無く、俺が木の実をとり、いくつかそいつにやる。それだけだった。

それだけだったけど、そのうち俺はこいつのことを、いて当たり前の存在と思うほど、大切に思っていた

無感情だった俺が、何かを大切に思うなんて初めてだった

捨てるなんて考えは、思い出しもしなくなっていた

気付けば、無色透明だった世界に、色がつき始めていた

筈だった。

蒸し暑い日だった

巣の中にいる「アイツ」は最近体もでかくなってきたから、その日は少し遠くの山まで足を運んで、木の実を多くとっていた

１５ｋｍ程巣から離れている山だったが、この［タヌキック］の脚力のおかげで楽に移動することができた

「こレだけあレば…まァタリルだロ。」

大きな葉で包んだ木の実を見て、俺はそう呟いた

ここ数日「アイツ」がいるので言葉を多く発していたからか、「ラ行」以外の言葉はずいぶん慣れた

使う機会なんてめったにないが、覚えて困るものでもない

こうしてくれた「アイツ」に軽く感謝しながら、俺は巣へと走った

走っている間、色々なことを考えていた

「アイツはラすいてんだロうな…。…いつまでも「アイツ」じゃかわいそうだな、よし、きょうは「アイツ」のなまえをかんがえてやロうかな」

元から名前の必要ない自分にタヌキチという名前を与えてくれたのに、「アイツ」には名前がまだ無いなんてよく考えればおかしいことだ。

巣に戻ったら、一緒にご飯を食べながら楽しく名前を考えよう。

俺は少しワクワクしながら巣まで走るスピードを、さらに上げた。

「…フフフ。」

生まれて初めて、自然に笑みがこぼれた。

俺達の住む洞穴の前についた時、違和感はあった。

別格優れた嗅覚を持っているわけでもない俺の鼻に、この洞穴の前にきてから強い鉄のサビのような臭いがしていた。

「なんだこのにおい…」

恐る恐る洞穴に入っていくと、その臭いはさらにひどくなっていく。

その時はまだ不安感とか、そういった類の気持ちは湧かなかった。

ありえないことだと思ってたから

そのままさらに進み、俺達が寝食を過ごしているスペースにたどり着くと、その臭いはひどいものになっていた。

どうやらここが発信源らしい。

俺はいつも「アイツ」が寝ているテント（草と木でつくった粗末なもの）を開け、声をかけた。

「おいおきロ、なんだこのに…」

絶句した。

そこにいたのは

いや

あったのは「アイツ」の姿では無く、真っ赤になった草布団と、その上で干からびた「何か」だった。

「なんだよ・・こレ・・」

わかっていた。

この山には主がいる。このやり方はソイツ以外考えられない。

「アイツ」は、「ソイツ」に見つかって、殺されたんだ。

…だけど

信じられなかった。

…信じたくなかった。

いつまでもアイツと楽しく過ごしていく日々が、こんなに簡単に終わらされてしまうなんて。

こんなに…あっけなく…奴の気まぐれで…

「・・・。」

俺は静かに草の上に無惨な姿で横たわるアイツの頭を撫でた。

そして、一滴残らず血を抜かれた体を抱え、強く強く抱きしめた。

「ア

アアアア

悲しみなんかより
今まで味わったことの無い、とてつもない怒りが俺の心を満たしていた。
「吸血鬼ゥ……」
俺はゆっくり、怒りが爆発してしまわないように、気持ちを抑えながら、奴…［吸血鬼（バンプ）］のいる山の最高峰を目指し、進み出した。

その時は、感情とともに形を変えていく自分の身体には、まだ気付かなかった…。

【ｃｈａｎｇｅ】

「この山は、俺のものだ。

つまり、この山にある食料は全て俺の物ってことだ。」

A級魔物［吸血鬼］と呼ばれる俺「バンプ」は、色々な魔物の血で作った「血液スープ」を飲みながら、そう口にした。

「ハ、ハイ！ソノトオリデスハイ！」

「アタリマエジャナイデスカ！」

「バンプサマニカナウヤツナドイマセンヨ！」

すかさず俺の下僕の魔物共が返答をしてくる。

ここはこの山の頂上に位置する場所。でかい屋敷じみた物を作らせ、俺はここに拠点を置いている。

「俺に敵う奴などいない…どこにもだ…だからどいつもこいつも俺に媚びへつらうように食料を納めにくる…可愛いやつらじゃないか…そういう自分の身分がちゃんとわかってる奴が、俺は好きだ…。」

そういうと、下僕共はまた媚びか怯えかわからない笑顔をした。そういう顔も、俺は大好きだ…が

「しかしっ！！」

「あのタヌキ…！！あいつは駄目だ！食料を持って来ないどころか！最近は［人間］まで所有していた！俺に何の報告も無しにだ…！！！」

俺が息を荒らげそういうと、下僕共はビクッと身体を震えさせ、ガタガタと震えだした。

「だからな…そんな身の程知らずのタヌキは、少々わからせた方がいいと思い、さっき俺が直接あいつの家に行った…」

「バ…バンプサマミズカラデスカ！！？」

「イッテクダサレバワ、ワタシガ…」

「……おい…誰が喋れと言った…？」

そういうと下僕共は震えていた身体をさらに震えあがらせ、冷や汗をかいている者も出てきた。

「俺が話してる間に割って入るってのは、それなりの覚悟を持ってなきゃできないよな…？今発言した二人…前に出ろ。」

「ソンナ…」

「ソンナ…」

「…前に出ろ。」

「…ふぅ。」

俺は下僕共が震えてその行為を見守る中で、二匹の魔物の血を飲み干した。

「今のを見て…悪いのは俺だって思うやつは？」

魔物共はブンブンと首を横に振り、否定の意を示す。

その顔には、理不尽な殺戮による恐怖と、自分でなくてよかったという安堵が張り付いていた。

いい……そのいい具合に絶望に満ちた顔は

俺が一番好きな表情だ…。

「…ナンダアイツ？

…アンナマモノ、コノヤマニイタッケ？」

その頃、見張りの魔物は山の頂上に向けてゆっくりと登ってくる一匹の魔物の姿を確認していた。

**ｄｏｇ覚醒…？**

……？

…あそこにいるのは見張りの魔物か？

誰の？

…決まってる。

「オイオマエ！ソコデトマレ！バンプサンニナニカヨウカ！？」

バンプ

その名前を聞いただけで怒りが爆発しそうになる自分を感じながら、俺は気にせず進んだ。

確実に止まると思っていたのか、その見張りの魔物はなおも進んで来る俺に若干うろたえながら、しかし、見張りの役割を果たそうとしてきた。

「オイ！オマエ「どけ」

隠すつもりもなく、俺はありったけの怒りを乗せてその言葉を放った。

その時の俺は、一体どんな表情をしていたんだろう。

アイツに見せたら、どんな反応を示していただろう。

ただ、笑ってくれないことだけは確かだな…。

俺はそう思いながら、立ち尽くす見張りの魔物の横を悠然と通り過ぎて山の頂に向かった。

な……

なんだ今の奴は…！？

「どけ」

あいつがそう言った瞬間、体に力が入らなくなった…

あの魔物の形相を見た瞬間…いや、あの魔物のオーラに触れた瞬間…戦意が喪失した…。

こんなことは、バンプ様に出会って以来だったな…

どうやっても敵わないということを、瞬時に理解してしまう相手…

一応俺もB級魔物なんだけどな…

俺はそう思いつつ、あの格の違う魔物が目指す山の頂を見た。

バンプ様…一体あの恐ろしい魔物とあなたの間に、何があったんですか…？

申し訳ありませんが…俺はもう、そこには行けません…

あの魔物のオーラにはもう…触れることができません。

俺は自分で情けないと思いながらも、その場に腰を下ろして、今だに溢れて止まらない無数の冷や汗を拭っていた。

「ここか…」

なんだここは…

俺はそう思いながら、目の前にある大きな木製の屋敷を見た。

「でかい…」

一体この山の木を何百本使ったら、こんな大きな屋敷になるのだろう。

俺はそんなくだらない考えを頭から消し去り、そこから入れと言わんばかりの大きな長方形型の入口から、中に入った。

奴はどこだ…？

とりあえず闇雲に探し回ってみるか…ん？

目を凝らすと、薄暗いこの屋敷の中で何か大きなものが数匹うごめいている。

あれは…クモ…？

少し見ていると気付かれたのか、そいつらは暗闇から姿を現して、その八本の脚を大きく開いた。

あれは多分、威嚇をしているのだろう。5、6…7匹はいるな…いや、天井にもう一匹か…

これも魔物の一種なのだろう…どこかの森には何十メートルもの体を持つカマキリの魔物もいるらしいから、その系統だろう。

それにしてもこいつらも…

「でかいな…」

一匹辺り3〜4mくらいの大きさがありそうだな…

しかも奴らは本物のクモ同様、きっと強靭な糸を尻から噴き出す。

一体一体がC級くらいか…？普通の魔物だと、一気に糸でまとめられて食われるだろうな。

「…ん？」

しかし、いつまで経っても襲ってこないな…

これは…「屋敷に侵入するな」という警告か？

きっと俺がもう一歩足を踏み出せば、すかさず襲ってくるのだろう。

……バンプよ…

これしきで…

俺が帰るとでも思ったのか…？

俺の怒りが…

抑え込めるとでも思ったのか……！！！！！？

俺は大きく足を踏み出した。

## ｄｏｇ覚醒…？（後書き）

新小説、「オートマチック☆ハート」始めました。

一つの小説も満足にかけねえのに二作目とかふざけんじゃねぇぞ！！と思う方もたくさんいるでしょうが

しょうがないじゃないか…俺も恋愛物が書いてみたかったんだ！

時々よそ見をすることも大切だもんね☆

てなわけで、これからもこんな駄作家Ｓをよろしくお願いします。

## ｄｏｇ覚醒…&ｌｔ；２&ｇｔ；

俺はその時、自分が既にタヌキックの姿をしていないことに気がついていた。

自分で擬態を解いた覚えはない。

つまりこれは、俺の姿がオートで変わっているということだった。

しかし、俺はこんな姿の魔物は知らない。

知らない魔物に何故擬態をすることができるのか？

俺は、何故か生まれた時から大体の魔物に擬態をすることができた。

頭の中に、最初から記憶されていたからだ。

だから吸血鬼のことだって知ってるし、なろうと思えばその姿に擬態することもできる。

だけど、自分の意思とは関係なく擬態することなんて今まで一度も無かった。

それも、知らない魔物に…。

だが俺は、何となく直感で気がついていた。

この能力は、自分に芽生えた新しい能力…

限界を越えた怒りを味わうことによって生まれた、新種の魔物…

いうなれば、この姿こそ、［ｄｏｇ］の最終形態と呼ぶべきか。

…ッフ

今まで自分じゃない魔物であいつと生活してきて

あいつが死んだ途端、そのおかげで本当の自分の姿を知ることができた

…できればあいつにも、見てほしかったな。

いや、あいつが笑っていられたのは俺が【タヌキック】というイノセント（無害な魔物）だったから。

こんな怒りから生まれたような姿なんて見ても、きっとあいつは笑ってくれない。

いや…そもそもあいつはもう…

「フ…フフ…」

このどうしようもない怒りを、どこにぶつければいい？

一体この哀しみを、どこに…

俺がそう思っていると、目の前のクモの魔物達はある者は糸で捕まえようと、ある者はそのままその八本の足を開いて、俺に飛び掛かってきていた。

こいつらでいいか。

怒りや悲しみ。そういった類の感情が増して行くのと比例するかの

ように更に自分の姿が変わっていくのを、俺は確かに感じていた。

【ｃｈａｎｇｅ】

…なんだ？

外が騒がしい…？いや、この音の大きさはこの屋敷内で何かが起きていると見てよさそうだな…

「おいお前」

俺は側にいた下僕を一人指差し、怯えるそいつに向けて「屋敷の中が騒がしいから、少し見てこい」と伝えた。

その際そいつは頭に疑問を浮かべたような顔をしていたが、やはり俺様が怖いからか、直接聞くことはしなかった。

まぁ無理もない…「耳がいい」と言うのも吸血鬼の能力のうちの一環の一つ。他のヤツ（魔物）には聞き取れない周波数の音も聞き取ることができるから、どんなに遠く離れた場所でも、全神経を耳に集中させれば、２ｋｍ先の囁き声くらいまで聞き取ることができる。

これは中々便利で、この能力を使ってあのタヌキの所有する人間の発する「音を見付ける」こともできた。

だから下僕どもには聞こえる筈も無いから、不思議に思うのも仕方ない。

しかし、だからこそおかしい…

こんな２ｋｍ先の音まで把握できる耳を使っても、この屋敷の中の「音」の出所を特定することはできない。

この屋敷の中というのは明らかなのだが、何か大きな力に邪魔されて聞き取れないという感じがする。

この山に、そんな膨大な魔力を持った悪魔は絶対にいない。

いるとしてもＡの下級やＢの上級くらい。そんなやつらに、俺の能力を防ぐことなど出来るはずがない。

ましてやその魔物も俺の下僕であるから、あいつらが屋敷の中で騒ぐ等と俺様のカンに障るようなことを、万が一にもするわけがない。

だとしたら…。

……

「わけがわからん…」

俺様はとりあえず、一度考えるのを止め、偵察に行かせた下僕の魔物が報告に帰ってくるのを待つことにした。

## ｄｏｇ覚醒［３］

…数分後、一つの足音が近づいてくるのがわかった。

と、言ってもまだ５０ｍ程離れてるから俺にしかわからないが。

俺は、さっき見回りに出した魔物が帰ってきたのかと思った。

しかし…

「…ナンダオマエ…！ドコカラ…ウッ！…」

「オマエ、イマナニヲ…ウッ…」

４０ｍ…３０ｍ…

「オイ、トマレ…ウッ！？…」

２０ｍ…

「オマエダレダ？ドウヤッテココマ…デ…」

…なんだ？

この足音が近付くにつれ、俺様の見張りの魔物達の声が消えていく…？

１５ｍ…

ここまで来たら、いくら薄暗いこの屋敷だろうと姿は見える。

しかし…こいつは…。

１０ｍ

完全に姿が見えるようになった時、俺はそいつに話しかけた。

「…お前…誰だ？」

すると、その魔物は足を止めた。

俺は目の前にいる魔物を、今まで見たことがなかった。

少なくともこいつは、この山の中の魔物では無いのだろう。

まず、鋭い赤い目。
そして３ｍはあるだろう体全体に生えた、思わず魅入ってしまいそうな美しい針金のような真っ白い体毛。
どうやら四足歩行のような足の先には、とても太くなんでもえぐってしまいそうな大きな爪が４爪。
そして口には、噛まれたら痛いじゃすまなそうな研ぎ澄まされた牙をこしらえていた。

薄暗い屋敷の中で、一際目立つ程真っ白な美しい魔物。

こんな魔物俺は知らない…

こんな向き合ってるだけで、並の魔物なら魂ごと吸い込まれそうになる真紅の目を持つ魔物など…。

「バンプ…。」

突然、目の前の白銀の魔物は初めて俺に向けてそう言った…喋れたのか。

「…俺様のことを知ってるということはこの森にいた魔物か？」

「ずっといた…。」

「ずっと？」

嘘だ。

こんな膨大な魔力を持ったやつがいたら、今まで俺にばれずにいられるわけがない。

しかし…何故こんな嘘を？

「ずっといたと言ったな…ならば今までどこに…」

「おレは今まで…おまえに逆らったことはない」

「は？」

「おまえが大量に保有してる食料を奪ったこともないし、おまえの手下の魔物を殺したこともない…」
「そうか。まぁそれは当たり前のことだ、俺様の物に手を出す奴なんて「だけどおまえは殺した」
「おまえは俺からアイツを奪った…俺の生活を壊した…俺の世界を殺した…！！」
アイツ…？
今まで淡々としていた口調が急に荒いでいくのを見る限り、そのアイツという魔物がそいつの地雷みたいだ。
敵討ち…か。
よくみると、この虎の形をした白銀の魔物の口元についているあの赤い液体は、どうやら俺の手下共の血のようだ。
俺は目を閉じて耳を澄ました。
しかし聞こえるのは風が屋敷内を吹き抜ける音だけ…こいつは屋敷内の魔物をほぼ全て噛み殺したのか。
そしてそいつは更に俺を睨みつけたまま続けた。
「だからラ俺は殺した…おまえの仲間を…この姿で…そして」
「おまえを殺す！」

そう言い切った。

「ふむ…」

この殺気、魔力を見る限り、こいつはA…いやS級クラスの力の持ち主だろう。

現にこの俺でさえ、こいつのこの鋭い眼光に見詰められて少し体が強張っている。

金縛りの呪い…いや、ただ単に殺気が尋常ではないというだけか。どうやら仲間が殺されたというのは、嘘じゃあ無いみたいだな…だが

「アイツなんて魔物俺は殺した覚えは無い…いや、殺した魔物の数が多すぎて、一々把握してられん。故に俺様とお前が闘う必要は、微塵も無い。」

そう言うと殺気が一層増して、それだけでB級魔物くらいなら殺せるのでは無いかという視線を浴びながら俺は続けた。

「だが…！
お前はこの屋敷の魔物を殺しすぎた！
この屋敷内にいる魔物を殺していいのは俺様だけだ！他の奴は触れることも許さん！
だから…お前は俺様に殺されろ。」

言い終わった途端、俺達は同時に飛び出した。

…！？

何が起きた！？

まさかやられたのか！？一撃で！！？

なんで俺の腕があんなとこにあんだ！？

S級魔物の俺がこんな死に方を…？

「…嘘だ」

【ｃｈａｎｇｅ】

「…は？」

弱い…弱すぎる。

こんなやつに今まで、ここの魔物達は従っていたのか？

…

なんだ…

倒したのに…

敵は討ったのに…

この満たされない気持ちはなんなんだ…

この姿になってから、何かが変わってきている。

この爪で、牙で獲物を殺す時に、快感を感じている。

俺は、何故ここにきた？

アイツを殺されたせめてもの恨みを晴らそうと思ってきたのに、これ以上何を求めているんだ？

俺はふと、足元に落ちていた切り落としたバンプの右腕を見た。

何故そうしたのかはわからない。

俺はその腕を拾い上げ、そのまま飲み込んだ。

今まで食べたどんな木の実よりも美味かった。

この中には、アイツの血も混ざっている筈…

アイツの血…

美味い…

この味が、もっと欲しい…。

気付けばその時からだった…俺が山を下り人間を喰らうようになったのは。

俺の心が、汚れていったのは…。

## ｄｏｇ覚醒［３］（後書き）

最後らへん適当になってすいません…

でもこのｄｏｇ編が自分で思ってるよりも全然長引いてしまったので、少々強引でも終わらせて次のステージに進むのが吉かなという愚策を使いました（汗）

ではこれからも不幸な異世界奮闘記をよろしくお願いします

アデュ！

## 氷上優ＶＳｄｏｇ…？

あれ以来、人間を食事として見ることに何の抵抗も感じなくなった…

小さい子供を喰うことも、何度かあった。

もちろんそれを守ろうとする親も…。

冷静に考えれば、おかしなことだとわかる。

自分の守っていた人間が魔物に奪われた俺が、今度は奪う側の存在になっているなんて。

人間を食すにつれ、言葉遣いも流暢になり知識もついつきたから、最低なことをしているとはわかっている。

でも、止められない。

あの日から始まったこの殺戮衝動と空腹感が日に日に強くなっていく。

だから俺は喰っていた…何も考えず、ただｄｏｇという俺を恐れて逃げる獲物を捕らえて喰っていた。

なのにこの女は、怖がらずに俺を見た。

俺が［ｄｏｇ］と知りながら、恐れることなく俺を見ている。

…くそッ

なんでアイツの顔が出てくる…！？

「…タヌキチ…」

やめろ…

「…タヌキチ」

やめてくれ

「なんで…」

やめ…

「なんでひとをころしてるの？」

「アァァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

【ｃｈａｎｇｅ】

「…！！？」

［束縛のアクアルーム］が溶けた…！？

見ると、さっきまでそこにいたシャープファングの姿をしたｄｏｇは、真っ赤な液体となりフローリングの床の上にびちゃびちゃと音を立てていた。

これは…さっき猫から魔物になった時と同じ…

擬態する…！！

「お、おいユーリ？今の狼みたいなのは…」

「優！」

「は、はい！」

「今のはｄｏｇ…さっきの擬態はたまたま私と相性がよかったから捕まえられたけど…次擬態されたら勝ち目はない…逃げよう」

「は？ドッグってあのＳ級とか言う…よし逃げよう！」

「「逃がさねぇ」」

「！！」

「どこだ…！？声しかしねーぞ！？」

「「そっちの奴…擬態を見るのは、初めてか？」」

この流れは…まずい！

「優…とりあえず走って…」

私はｄｏｇのことをあまり知らない優を危険な目に合わせないようにしようと走るように促したけど、もう遅かった…。

「おいおい…狼が虎になったよ…」

目の前にいる魔物はさっきまでのＣ級魔物じゃない…白い針金のような毛が体中から突き出、鋭い牙と爪を携えた３ｍ余りの虎…。

こんな魔物見たことないけど、あの真っ赤な目を見た途端に動かなくなった体を見た途端、震えが止まらなかった。

怖い…怖い…

呼吸がうまくできない…

「ユーリ！？」

すぐに足が震えすぎて立っていることもできなくなり、冷や汗が止まらなくなっていた。

さっきのカマキリの魔物…ササガネムシャと格が違う…

視線だけで…殺されそう…

意識が薄れて気を失いそうになった時、優が体の崩れた私の側に来て強く手を握ってくれた。

「大丈夫かユーリ！？」

「だ…だい…」

喉も震えちゃって声が出せない…

優にこんな姿見られるなんて…バカ…今はそれどころじゃない…

「おいドッグ！ユーリに何したんだ！！」

駄目優…あの虎の魔物は絶対にS級…それに、その中でもかなり上のクラスに違いない…刺激しないで。

そう言いたいのに、体の震えがそう話させてくれない。

優はこんなに怯えずに頑張ってくれてるってのに…って

…え？怯えずに？

私は見られただけで魂が引きずり出されるのではないかと思うくらいなのに、優は今完全に見つめ合ってる…

「ありえない…」

！？

喋れる！？なんで？

そういえば体の震えも段々収まってきている…

…優に手を握られたから？

私は今だにｄｏｇを睨みつける優を見た。

優…あなた一体…？

## 氷上優ＶＳｄｏｇ…&ｌｔ；２&ｇｔ；

【ｃｈａｎｇｅ】

「ユーリに何した！」

俺は目の前の巨大な白い虎を睨みながらそう言った。

目の前に虎

前の世界にいた時ならパニックになってもおかしくない状況なのに、何故か俺の心は落ち着いていた。

何故かこの世界にきてからというものできないことは何もないと思うくらいに自信が溢れていて、この魔物もさっきのカマキリみたいに何とかなるのではないかと思っていた。

でも今はユーリが動けないし…どうしたものか…

「馬鹿！逃げなさい優！」

そんなことを考えていると、不意にぷー子が焦ったような声でそう言った。

「なんだお前、もう機嫌は治ったのか？」

俺が半笑いしながら冗談っぽく言ってもぷー子はいつもみたいに怒

声で返さずに、口早に説明するように話した。

「私は生まれた頃から大概のことは知ってるの、この国の成り立ちとか、魔物の種類とか、歴史とかね。それであの虎の魔物は、数百年前から存在してるんだけど、どの魔物にも属さないたった一匹の魔物なの…」

「うん…それで？」

「…個体数が１匹しかいないのに数百年前から存在している魔物は、この世界に［ｄｏｇ］のみ…どういうことかわかる？」

「つまり…」

「あれが、擬態をしていない［ｄｏｇ］の元の…真の姿ってわけよ」

「この姿をした時のｄｏｇは［白虎（びゃっこ）］と呼ばれて、普段より数倍獰猛な性格、次々と人を殺しては食べる最悪な魔物…この魔物一匹のせいで滅亡に追い込まれた国も３つ程確認されてるわ…。」

「白虎…」

「他にも青い龍とか朱い鳥、蛇と亀が一つになったような魔物も白虎と同じ個体数が１つだけの数百年前から存在した魔物と言われてて、その３匹全て白虎と並ぶ強さと狂暴さを持ってると言われてるわ。」

「青い龍…朱い鳥…蛇と亀…」

青龍(せいりゅう)、朱雀(すざく)、玄武(げんぶ)…？
おいおい…確かこいつらって俺の世界の方では神様の筈だろ…はは
っこっちの世界では、魔物もやってんのか？大変だな。
「まだこっちの様子を伺ってるみたいだけど、あいつがその気にな
ればあんたなんて一瞬で殺される…だから早く逃げなさい、優！」
頭の中でそう言ってくるぷー子の言葉はいつもと違い余裕がなさそ
うで焦っている…本気で心配してくれてることがわかる。
ありがとうぷー子…でも、それはできない。
「ぷー子…動けないユーリをここに置いていくことはできない。」
「…でも！」
「第一そんな簡単に逃げられるような魔物なら、誰も恐れたりしな
いだろ？」
そういうとぷー子は返す言葉が無くなってしまったみたいで、黙り
込んでしまった。
「ぷー子、今からお前を頭から出す。…だからユーリを連れて逃げ
てくれ」
「逃げてくれって…アンタは…優はどうするのよ！？」
「俺はぷー子達が逃げられるように、少しでもこいつを足止めしと
くから…」
「な…無理よ！アンタまだ自分の能力もわかってないし…何よりさ
っきのササガネムシャとの闘いの怪我も完全に治せてはないんでし

ょ！？」

「大丈夫、なるようになるって。」

俺はそう言いながら自分の腹をさすった。…よし、完全に治ってる。

そして次に頭の中でぷー子を目の前に出すイメージを浮かべた。

「じゃあユーリを頼むわ…大丈夫、必ず追わせない」

俺は支えていたユーリをぷー子に無理矢理押し付け、白虎に向き直った。

「…！やっぱり…」

「ぷー子！！…お前は俺の相棒だ！！」

「…え？」

「俺は死なない！信じろ！！」

背中を向けたまま力強くそういう俺を見て、ぷー子は一瞬きょとんとした後、もう何を言っても聞かないと悟ったのだろう。

そのままユーリをかついで歩き出した。

「…優！」

すると不意にぷー子は後ろを向いたまま大声で

「…ッ、死んだら殺すから！」

そう言って、また歩き出した。

「……！

おう！帰ったらこの旅館でパーティだ！」

俺もまた、後ろを向いたままそう応えた。

「…てわけで悪いな［ｄｏｇ］、いや［白虎］だっけ？俺あいつに殺されたくないから、死ねなくなっちまった。」

「・・・」

「でもあんたも律儀だな、わざわざこんな長い間隙だらけだった俺達を襲わないなんて…？」

**氷上優ＶＳｄｏｇ…？**

【ｃｈａｎｇｅ】

「襲わないなんて」

目の前の男はそう言った。

なぜそんなことを言った？

俺の体を動かせなくしたのは、お前だろ？

…力を持ってみると、相手の力がわかるということがある。

例えば空手や柔道の経験者等がそれだ。

今俺が擬態した魔物【白虎】は、Ｓ級魔物の中でもトップクラスの魔力を持っている。

だから、わかる。

さっきまではただの少年にしか見えなかったこいつに隠されたとてつもない魔力が…

そして気付くと、動けなくなっていた。

動作も無しに俺の体の自由を奪う魔法使い…

そんなやつこの国…いや、この世にいるはずがない。
わけもわからず男を睨みつけることしかできない俺に、目の前の少年はそう言った。
「時間稼ぎくらいはできっかな…？」
次の言葉はこれだった。
時間稼ぎ…？
こいつ…自分の異常な量の魔力に気づいてないのか？
それがわかると、俺は少し緩んできた口元を閉じた。
これは勝機につながる…
という、確信を持って。

「時間稼ぎなんてできるわけねーだろ…俺を誰だと思ってんだ！！」
自分の魔力量を何故知らないかなんてどうでもいい。
とにかくこれは、つけ入る隙になる。
俺はそう確信していた。
「…かもな。
でもな、俺はお前に殺されたとしても、お前にあいつらを追わせられない理由があんだよ」
「何言ってんだ？お前殺してあいつら殺して皆喰う。

そうなることはもう決まってんだよ！」

「…お前…」

「だ、だけどまぁ、一人で残って他のやつらを逃がした時は素直に感心したぜ？
思わず見入っちまって襲うの忘れてた。」

「…？」

な…何だ今の魔力！？
元々桁外れにある魔力がさらに増えた！？

こいつ一体何者なんだ…
いや、考えるな。
考えずに、気付かない振りをし、こいつを上手く引き離すんだ…。

「だからそこを買ってやってな、お前がもし邪魔しないってんなら、お前だけは喰わないでやるよ！」
終わった。
今までに盾として残った奴は何人かいたが、どんな奴だろうと最終的には自分の命が惜しい。
だから俺はそんなやつにはずっとこう言ってきた。

するとどうだ？全員が安堵の表情を浮かべて承諾する。

実際他人との繋がりなんて、そんなもんだ。
ただ、利害が一致するか？
それだけ。

だから全員、承諾する。
「自分が助かってよかった」
という顔をしながら、承諾する。
まぁ結果としてはそいつのことも喰うんだけどね。
つまりこいつもそんな奴らと同じ、体裁と精一杯の度胸で盾になった一人。
すぐ乗ってくるはず…
「…か」
「あん？」
「二人を売ったら、自分だけは助かるってことか」
ほら…やっぱりな
「ああ、悪くないだろ？あんな女二人くらい、これからいくらでも手に入るかも知れない。
でも、自分が死んだらそれもできないんだぜ？」
どんな魔力を持ってようと結局こいつも同じ…
自分可愛さに他人を売るような下衆…
これでこいつは確実に乗ってくる！！
俺がそう確信すると、目の前の少年は何かを一人でつぶやきだした。

「そうか…あいつらを見捨てれば俺は助かるのか」

「フ…フフフ」

…はいおしまい。駄目人間一丁上がり。

そう思いさっきの女を食いに行こうと動き出そうとした俺だったが、突如襲ってきたとてつもない殺気と魔力によって急に身動きが取れなくなった。

「！？」

わけがわからない俺を鋭い目付きで睨みつける少年。

いつもと逆の立場な状態に戸惑っている俺に、その少年は隠そうともしない怒気を含んだ声で言った。

「ふざけたこと言ってんじゃねえ！！」

「他人を見捨てる…

それは俺が一番嫌いな行為だ！！

もしそれで助かったとして、この先一生、その呪縛に縛られたまま笑っていられるか！？

平和な生活を幸せに送れるか！？

できるわけねぇだろ！！！

一生罪悪感と後悔という怨霊が纏わり付き、終いには生きるのが辛くなって気が狂う！！

それに、あんな女…？

なんも知らないお前があいつらを馬鹿にすんな！！

もし俺があいつらを失っても、女は星の数程いる。

だけどその中でも、ぷー子とユーリという人間はあいつらだけだ！！！

それにあいつらの命を軽々しく終わらせる権限なんて俺には、ましてお前になんかあるわけない！

足止めだなんだ言ってたけど

止めだ！！

お前は！ここで俺が倒す！！」

## 氷上優ＶＳｄｏｇ…？

「お前はここで俺が倒す！」

そいつがそう言った瞬間、爆発的な魔力の上昇と共に、今まで空手だったそいつの手には、いつの間にかどでかい鎌が握られていた。

あの形は…ササガネムシャの第三の鎌……？

なんだそれは…

魔物と同じ能力…？

いや、そんなことどうでもいい。

形等はさしてたいした問題ではない…

それより危険なのは、あの鎌から隠し切れない程漏れだしている威圧感

ただでさえ持ち主が化け物並の魔力を持っていると言うのに、それを差し置いてあの圧倒的存在感…

「ちょっとやべぇな…」

小声で発したそれは意識して出したものではなく、俺の素直な感想であった。

実際そう思っても仕方ないほど、あの鎌は危険だと一瞬で理解した。

…さっきの質問、地雷だったか…しくった。

そんなことを考える俺を尻目に、少年はその２ｍ以上ある鎌を目の前で軽々と回し始めた。

【ｃｈａｎｇｅ】

「ん……」

ここは…どこ？

私今、誰かに引きずられてる…

なんで…？

えっと私、優にタオル持っていこうとして…

そうだ…ｄｏｇなのに猫がいたんだ…

あれ？そっからどうなったっけ…？

私が必死に考えていると、いきなり頭上から声がした。

「ちょっと！起きたんなら自分で逃げなさい！！」

…ぷー子さん？

私は目の前に現れていきなり態度の大きい優の相棒に少しムッとしたけど、あまり表情には出さないで「わかりました」とだけ言って立ち上がり、ぷー子さんの隣に並んで共に歩き出した。

「どこに向かってるの…？」

私がそう聞くと、ぷー子さんは私の方をちらりとも見ずに

「知らないわよ！！」

と、早足のまま怒鳴りつけた。

ムッ。

やっぱりこの人キライ…

単純で感情任せで…会話にならない…

ん…？そういえば…

「逃げるって…？」

私がそう言った途端ぷー子さんはピタっと足を止め、私の顔を不思議そうに見た。

「ふざけてるわけじゃなかったのね…

多分一時的な記憶障害だと思うけど…私がわかるってことはあの時の記憶だけなくなってるのかな…」

と、よくわからないことを言い始めたので、「どういうこと？」

と聞くと

「いいから来なさい！！」

と言われた。

ムムッ……。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7808k/

不幸な異世界奮闘記

2011年7月16日07時44分発行